



七  
日本立志編

一名脩身規範  
于河岸貫一著述

三

和装本

9  
3739  
3





門 口 8  
號 3739  
卷 3

日本立志編卷三目次

勤勉ノ部

人高遠ノ志アリト雖氏勤勉スルニ非ズンバ事業ヲ成就ス可カラザルヲ叙ス

- 第一 栗田左大臣謹恪ヲ以テ嘉尚セラレシ事
- 第二 馬場信房松本桂林ヲ疎ミシ事
- 第三 稻葉一徹文雅ヲ以テ害ヲ免カレシ事
- 第四 佐野了伯平語ヲ演セシメタル事
- 第五 林羅山除日ヲ以テ講ヲ起セシ事
- 第六 山崎嘉右衛門三樂ヲ語リシ事
- 第七 伊藤仁齋赤貧ニシテ苦學セシ事
- 第八 三宅重固獄ニ在テ書ヲ著セシ事

昭和六年一月十一日寄  
厄野貴英氏贈



第九 貝原篤信老テ猶ホ怠ラザリシ事十五丁

第十 原尚菴學ヲ嗜ム事十七丁

第十一 澤維顯遊戯ヲ好マザリシ事十八丁

第十二 井上嘉膳戸ヲ閉ヂテ書ヲ讀ミシ事二十丁

第十三 伊藤莊治古語ヲ壁ニ貼シテ自ラ警言シメシ事二十一丁

第十四 加々美光章線香ヲ燒テ書ヲ讀ミシ事二十二丁

第十五 神屋彌右衛門文武ニ兼通セシ事二十三丁

第十六 中西維寧恆ニ寢ニ就クヲ無カリシ事二十五丁

第十七 蘆野孝七郎幽囚セラレテ書ヲ著ハセシ事二十七丁

第十八 石多仲曆子一冊ヲ廁中ノ壁ニ糊塗セシ事二十七丁

一八丁

第十九 莊田靜志ヲ立テ忠誠ヲ以テ自ラ勗メシ事二十九丁

二十九丁

第二十 細井德民篤志力學ニ由テ德望ヲ得タル事三十丁

三十丁

第二十一 並川彌左衛門論語ヲ讀ムヲ聞キシ事三十三丁

第二十二 應舉心ヲ專ラニシテ繪事ニ刻苦セシ事三十四丁

第二十三 森祖仙三年山ニ在テ其技ヲ切磋セシ事三十六丁

第二十四 熊代彦之進虎圈ノ前ニ在テ虎ヲ畫キシ事三十六丁

三十六丁

第二十五 池無名發憤苦勵セシ事三十八丁

第二十六 皆川淇園讀書ニ謹勉セシ事三十九丁



第廿七 賴子成勉強刻苦シテ其志ヲ達セシ事四十一丁

第廿八 古川某地理ヲ究メンガ為メニ海内ヲ歴遊七シ事 四十六丁

第廿九 森宇左衛門書ヲ手寫シ數十筐ニ至リシ事四十八丁

第三十 觀世次郎太夫倉父ヲ師トセシ事四十九丁

第卅一 寶生彌五郎指ヲ咋ムデ假面ニ血ヌリシ事五十丁

第卅二 山田琳卿學業ヲ勤メ實踐ニ厚カリシ事五十二丁

日本立志編卷三

千河岸 貫一 撰述

勤勉ノ部

人高遠ノ志アリト雖凡勤勉スルニ非ズシバ事業ヲ成就ス可カラザルヲ叙ス。

人恆ネニ儉素ヲ尚トビ其志ヲ高遠ニシ敢テ奢侈ノ風ニ眩セズ小成ニ安ンズルノ俗ニ泥マズト雖凡遊惰ニシテ其志ス所ノ事業ニ刻苦セズンバ種ヲ良田ニ播シテ而シテ耨ラザルニ同ジ何ヲ以テ其事業ヲ成就スルヲ得ンヤ且夫人心ハ逢フ所ノ境ニ隨テ移動シ易ク時ハ少ラクモ止ラズ一日一夜二十四時アリト雖凡現在ノ時ハ僅カニ



一秒時ノミ。前ナル者ハ既ニ去テ復タ還ラズ。後チナル者ハ未ダ來ラザレバ、預メ之ガ措置ヲ爲シ難シ。人生三萬六千ノ光陰此現在ノ一秒時ヲ多ク積累セシモノニ外ナラズ。然ルニ其腦裡ニ於テ一タビ某事ヲ爲シ、某業ヲ成サントスルノ志ヲ興スアリトモ、或時ハ存在シ、或時ハ亡滅シ、有ルガ如ク無キガ如クナランニハ、決シテ其事業ヲ成就スベカラザルナリ。故ニ一タビ志ヲ立テ、某々ノ事業ヲ果タシ遂ゲント思惟セル、一秒時間ノ思想ヲ永ク保續シ、以テ身ヲ終フルニ至ルキハ、所謂精神到處金石皆透ル、何事カ成ラザランヤ。然ルニ其初志ヲ保持シ、以テ久キニ及ブニ就テハ、種々ノ障礙ヲ來タシ、其志ヲ遮斷セララル、無キ能ハズ、其之ヲ遮斷セララル、ニ際シ、百折撓マズ、千挫屈セ

セズ、銳進シテ止マザル所ノ勤勉カアルニ非ズンバ、決シテ其初志ヲ遂グルノ日ニ逢フ可カラザルナリ。彼松柏ノ鬱蒼トシテ天ニ參ハルヲ視ヨ、幾多ノ風雨霜雪ヲ經テ、其色ヲ改メス、其年ヲ經ルノ最モ久シキハ天下ノ良材トナル。人有用ノオト呼ビ、有爲ノ士ト稱セララル、モ亦然リ。若シ其勤勉スルノ僅カニ數月、若クハ期年ニシテ、人材タラントスルハ、猶ホ獨活ノ老大ナルガ如キ者ノミ、亦何ゾ齒牙ニ措クニ足ランヤ。然レバ則チ洋ノ東西ニ論無ク、時ノ古今ヲ問ハズ、人生事業ノ成否ハ、勤勉ノ多寡如何ニ由レリ。然ルニ世人或ハ先賢古哲ヲ視動モスレバ、天資英敏ニシテ勉強ヲ待タズト爲ス、是賢哲ガ尋常ニ百倍スルノ力ヲ用キタル苦辛ヲシテ、水泡ニ歸ヒシムル者ト謂フヘシ。



常人ハ勉強ニ間斷アリ工夫ニ罅漏アリ唯賢哲ハ間斷ナク罅漏ナク精純不息ナルガ故ニ能ク常人ノ到ル能ハザルノ地ニ達セルノミ周文ノ魯々孔子ノ敏求周公ノ且ヲ待ツノ類聖人ト雖氏ミナ然ラザルハ無シ朱子云堯誓于衆舜取諸人豈是信步行將去某嘗看朋友好論聖賢等級看來却不消如此說如千里馬也須使四脚行駕駘也是使四脚行不成說千里馬都不用動脚便到千里只是他行較快耳ト此說真ニ然リ然ルニ佚ヲ好ミ勞ヲ厭フハ人ノ常情ナルヲ以テ數其志ヲ激勵スルニ非レバ怠惰ニ流レ易シ左ニ列記スル所ノ如キハ則チ古來有名ノ學士等ガ勤勉倦マザリシ事蹟ニシテ後進ノ士ガ其心志ヲ激勵シ之ヲシテ間斷無ク罅漏ナカラシムルノ鞭策タルベキモノナラン

第一 粟田左大臣謹恪ヲ以テ嘉尚セラレシ事

藤原在衡朝臣ハ中納言山陰ノ孫ナリ伯父有賴養テ嗣ト爲ス延喜十二年文章生ト爲ル安和中累進シテ從一位右大臣ニ至リ尋デ左大臣ニ轉ズ其職ニ在ル未ダ嘗テ朝參ヲ廢セズ一日風雨暴烈ナリ衆相謂テ曰ク勤恪在衡公ノ如キモ亦朝參ニ艱ムト言未ダ畢ラズ簔笠者至ルアリ之ヲ視レバ則チ公ナリ時人數稱ス公豫テ帝ノ讀ム所ノ書ヲ知リ朝ニ入ル毎ニ車中必ズ其書ヲ載セ顧問スル所アレバ則チ應對明悉ナリ是ヲ以テ才學ノ人ニ過グル無シト雖臣深ク嘉尚セラレ其薨ズルニ及ビ從一位ヲ贈リ粟田ノ左大臣ト稱ス



櫻所子曰ク、凡ソ士朝ニ在ルト野ニ在ルトニ論無ク、各自ノ勤ニ服シテ怠ラザルヲ以テ、修身ノ第一義トス。假令才學ノ人ニ過グルアリト雖、苟モ其職務ニ怠ラバ、瑕疵トシテ指斥セラル、ヲ免ガレズ、宜ナル哉。公ガ才學人ニ過グルナシト雖、其謹勉ノ人ニ過グルヲ以テ、深ク嘉尚セラレシト、今世才ヲ負ヒ氣ヲ恃ムデ、各自ノ勤メニ服スルヲ厭フ者、假令才氣人ニ過グルアリト雖、遂ニ世ノ輕賤スル所トナラン。

第二 馬場信房松本桂林ヲ疎ミシ事

松本桂林ハ書ヲ讀ミ、善ク和漢ノ事蹟ヲ知ルヲ以テ、或時馬場美濃守信房、諸葛孔明ノ人トナリヲ問フ。桂林即チ説テ曰ク、孔明ハ躬カラ耕シ、劉備其材能アルヲ聞テ、三たび

草廬ヲ顧ミシニ及ビ、終ニ三分割據ノ策ヲ畫セリ云々ト。信房以為ク、桂林ハ學者ナリト。時ニ真田ノ家士甘利同心須原宗左衛門ノ來リ訪フニ會ス。信房之ニ接スル頗ル鄭重ナリ。其歸リシ後チ、桂林恠ムデ謂テ曰ク、彼ノ輩ハ他ノ士卒ノ微俸ヲ享ルモノナリ、何ゾ其接遇ノ太ダ鄭重ナルヤト。信房此ヲ聞テ以為ク、我ハ劉備ガ材能アル農夫ヲモ、三たび駕ヲ枉ダテ聘セシト聞ケバ、人ハ材能ハ尊貴ナル者ナリ。彼甘利須原二士ノ如キハ、智畧アリ、勇武ノ名譽高キ者ナルヲ以テ、其材能ヲ敬シテ、懇懃ニ接待セリ。然ルニ桂林ハ自カラ劉備孔明風雲際會ノ事ヲ説キ、翻テ我ヲ尤ムルハ言行相撞着スルニ非ズヤ。然レバ則チ書ヲ讀ムトヲ解セザルモ、其事實ニ体達スル者ヲコソ、真ノ學者



日本書紀卷之三  
ト謂フベキナリト。

櫻所子曰ク世ノ講學ヲ事トスル輩徒ニ文字章句ノ末ヲ  
攻メ或ハ博洽記誦ヲ貪ボリ歟々トシテ議論ヲ逞フスル  
モ曾テ心上ニ向テ前賢古哲ノ言行如何ト推究セザル者  
滔々トシテ皆是ナリ口ニ修身ヲ説キ經濟ヲ談ジ權利ト  
イヒ自由トイフモ心ニハ志操無ク檢束無キ何ゾ此類シ  
テ學士論者ト稱スルヲ得ンヤ兩森芳洲謂ヘルコトアリ曰  
ク諸レハ戲場ニ觀ル且ツ孝婦タリ且ツ義夫タリ觀者ヲ  
シテ心ニ感ジ涙ヲ揮ハシメザルハナシ稱讚已マズ戲終  
レバ則チ舊ニ仍テ庸夫俗子ナルハミ書ヲ講ズル我輩ノ  
如キモ皆一優人ノミト善哉言ヤ今ノ所謂學者ハ則チ梨  
園弟子ノ忠臣節婦ヲ扮スルト一般ニシテ彌兒ノ假聲ヲ

為シ蘆騷假面ヲ冒フテ人ヲ嚇ヒントスル者多カラス  
トセズ美濃守ヲ為メニ疎マレザル者ハ益シ鮮ナシ學ニ  
志ス者意ヲ躬行心得ニ注カスンバアル可ラス

第三 稻葉一徹文雅ヲ以テ害ヲ免カレシ事

稻葉伊豫守通朝後チ髮ヲ削テ一徹ト稱ス齋藤龍興ニ仕  
フ龍興暗弱ニシテ暴政多シ將士多ク心ヲ織田氏ニ歸ス  
通朝驥諫ムレバ改メズ通朝其與モニ為スアルニ足ラザ  
ルヲ知り終ニ去テ織田氏ニ屬ス而シテ信長意未ダ釋然  
タル能ハズ乃チ茗謙ヲ設ケ之ヲ茶室ニ延キ竊カニ其良  
三人ヲシテ伴接ニ托シ以テ之ヲ圖ラシム一徹從容トシ  
テ茶室ニ入り壁間掛ル所ハ詩ヲ朗吟シテ曰ク雲橫秦嶺  
家安在雪擁藍關馬不前ト三人就テ其義ヲ問フ一徹曰ク



是ハ割、韓愈カ潮州ニ諭セラル、時作ル詩ナク、  
ト、其事實ヲ分解スル甚ク詳カナリ、信長壁ヲ隔テ、頭聽  
シ、忽然トシテ走ル出テ、徹ニ謂テ曰ク、我レ初メ卿ヲ以  
テ一武勇男子ト謂ヘルナリ、今乃チ其文學アル此ノ如ク  
ナルヲ知ル、猜疑ノ心頓ニ消ス、何ゾ殘害スルニ忍ビンヤ  
ト、乃チ告グルニ密謀ヲ以テス、二人ニ命シ、各ヒ首ヲ懷ヨ  
リ出サシメテ之ヲ示ス、一徹頭首シテ謝シ、袖裏亦刀ヲ出  
シ、笑テ三人ニ謂テ曰ク、今日ノ事、僕モ亦戒心無キニ非ズ  
ト、信長嗟賞之ニ久シ。

櫻所子曰ク、危哉一徹、若シ不學無術ニシテ、文字ヲ解セズ、  
古人ノ詩ヲ演説スル能ハズンバ、馬ンゾ刀俎魚肉ノ間ニ  
在テ、能ク從容トシテ以テ萬死ニ一生ヲ得ルアラシヤト。

夫レ人ハ其心ヲ娛マシムル丁無キ能ハズ、詩歌書畫ヲ學  
ブカ如キハ、心ヲ娛マシムルノ資料ニシテ、但輕重本末ヲ  
失ハザレバ、其益多シ、况ヤ學術徳行人ノ身ヲ立テ家ヲ興ス  
ベキ者ニ於テヤ。

第四 佐野了伯平語ヲ演セシメタル事

佐野了伯ハ、佐野ノ城主佐野宗綱ノ弟トリ、髮ヲ削テ天徳  
寺ノ主ト爲ル、天正十三年、宗綱没シテ嗣無シ、了伯佐竹義  
宣ノ族ヲ以テ嗣ト爲サント欲ス、其老大貫某竹邊、某等、青  
ソセズ、北條氏政ノ弟氏忠ヲ迎ヒ、立テ、嗣ト爲ス、了伯怒  
リ、去テ京師ニ如キ、黒谷ニ隱ル、其驍名夙トニ著ル、ヲ以  
テ、豐臣秀吉公、北條氏ヲ征スルニ及ビ、了伯ヲ召シテ、鄉導  
ト爲ス、佐野氏ノ舊臣ヲ招降ス、時ニ氏忠、小田原ニ在リ、留



守ノ將士皆了伯ニ應ズ、獨リ大貫氏從ハズ、乃チ攻メテ之  
ヲ殺ス、秀吉了伯ヲ以テ佐野ノ城主ト爲ス、了伯之ヲ辭シ  
富田左近將監次子政綱ヲ以テ宗綱ノ後ト爲サンヲ請  
フ之ヲ許ス、了伯人トナル智辯ニシテ義ヲ重シズ、嘗テ琵琶  
法師ヲ招ギ平語ヲ演セシム、曰ク我が爲ハ一悲愴ハ曲  
ヲ奏セヨト對テ曰ク諾乃チ佐々木高綱宇治川ノ曲ヲ奏  
ス、了伯愴然トシテ涕下ル、奏シ闕テ又一曲ヲ請フ、那須宗  
高扇ノ的ノ曲ヲ奏ス、了伯愴然トシテ涕ヲ出シ、後チ左右  
ニ語テ曰ク前日ノ平語汝チニ於テ如何、咸ナ對テ曰ク絶  
妙ナリ、獨リ恠ハニ曲皆勇氣奮發人ノ胸懷ヲ快ラス、而  
シテ君獨リ之ヲ悲ムハ何バヤト、了伯歎シテ曰ク吾今ニ  
シテ後チ汝ガ輩皆賴ムニ足ラザルヲ知ルナリ、夫レ高綱

騎ル所ノ馬ハ源右府之ヲ其親弟ト其寵臣トニ予ヘズシ  
テ獨リ之ヲ高綱ニ賜フ、高綱右府ニ矢テ曰ク臣衆ニ先ダ  
ツテ宇治川ヲ騎渡ヒズンハ復タ生還セズト、宗高ノ如キ  
モ亦然リ、源判官熊籠ハ士固ヨリ乏シカラザルナリ、而シ  
テ宗高衆ニ抜カレ、獨騎海中ニ向フ、兩軍皆戰ヒヨ息メテ  
觀ル、是時ニ當リ若シ射テ中タラズンバ、宗高必ダ屠腹シ  
テ死セシ、二子ハ先ヅ死ヲ胸中ニ決ス、是ヲ以テ其情ヲ察  
ス、我レ安ヅ之ガ爲メニ悲マザルヲ得ンヤ、我戰ヒニ臨ム  
常ニ二子ノ心ヲ以テ心ト爲ス、故ニ其曲ヲ聽テ其感ニ堪  
ヘザルナリ、汝等ガ勇ハ唯血氣ニ任カス、其實ニ出ルニ非  
ズ、事ニ臨ムテ豈ニ恃ムニ足ランヤト、  
櫻所子曰ク志士ハ溝壑ニ在ルヲ忌レズ、勇士ハ其元ヲ喪



一ヲ忘レズ故ニ古代戰陣ニ於ケル事ヲ聞ク亦悲愴ノ感  
情ヲ喚起スルヲ致ス所以ナリ所謂活眼ヲ以テ活書ヲ讀  
ム者了伯ノ平語ヲ聽クガ如キヲ謂フナル可シ思フニ古  
來英雄豪傑ノ士及ビ一技一藝ニ名アル者ハ其志恆ニ存  
シテ精神ヲ茲ニ止メザル無シ視ヨ郭泰ハ材ヲ求ムルノ  
心アリ故ニ茅容ガ雨ヲ避ルヲ見テ其異常ノ器能アルヲ  
知ル越前少將勇武ヲ以テ天下絶倫ト稱セラレントスル  
ノ志恆ニ存ス故ニ舞妓ノ曲ヲ奏スルヲ觀ルモ亦涕泣ス  
顏面ハ孝養ヲ思フ故ニ飴ヲ見テ老ヲ養フベキ者トシ盜  
跖ハ翻テ之ヲ戶樞ニ塗ルノ具ト爲スガ如シ然レバ則チ  
了伯ガ平語ヲ聽クハ移シテ以テ史ヲ讀ミ書ヲ解スルノ  
法ト爲ス可キノミナラズ學藝技術ニ志ス者ハ渾テ其精

神ヲ恆ニ其學習スル所ニ存スレバ遇フ所ノ境渾テ其志  
氣ヲ激勵シ誘テ以テ妙境ニ趣向セシムルノ具タラザル  
無キヲ知ルニ足ラン夫レ此ノ如クナラバ天地萬物耳目  
ニ觸ル所ノ者悉ク是我藥籠中ノ物タリ若シ之ニ反シ  
テ酒色若クハ玩好ノ爲ニ其志恆ネニ存スルヲ無クンバ  
口ニ中外古今ノ事蹟ヲ談ジ心ニ和漢歐米ノ賢哲ノ嘉言  
善行ヲ諳ムスルモ諺ニ所謂隣家ノ財産ヲ算フルガ如ク  
亦何ノ益カアラシヤ知ルベシ人ノ勇怯巧拙アリ智愚賢  
不肖アル所以ノ者至竟勤勉ニシテ恆ニ其志ヲ精神ニ存  
ゼザル無キト怠惰ニシテ時トシテハ其志ヲ遺失スルヲ  
アルトニ由ル察セザル可ケンヤ

第五 林羅山除日ヲ以テ講ヲ起セシ事



林信勝、羅山下、號ス、徳川氏創業ノ時ニ際シ、大ニ任用セラレ、儀則律令ヲ創定シ、幕府須ユル所ノ文書、其手ヲ經サル者ナシ、初メ家康公ノ召ニ應ジ、四世ニ歷仕シ、即位改元、行幸入朝、禮及ビ宗廟社稷祭祀ノ典、外國ノ事、與カリ議セザルナシトイフ、其博洽ナル、天下ノ書ニ於テ讀マザルナク、著スル所凡ソ百有餘部アリ、中ニ於テ本集百五十卷、詞工ナラザルモ、其言徵スルニ足ル者多シ、其暮年ニ及ンデ、視聽衰ハズ、寸陰ヲ惜ムデ、勤勉スルヲ、猶ホ少年ノ時ニ減ゼズ、少キヨリ二十一史ヲ讀ム數過ニシテ、晉書以下未ダ句セズ、年七十四ニ及テ、遍ネク之ヲ句セント欲シ、晉書宋書、南齊書業ヲ畢リ、其翌年ニシテ没セリ、羅山嘗テ人ニ邀ヘラレテ、祇園會ヲ觀ル、適一諸生棠陰比事ヲ袖ニシ來テ

問フ、羅山一々之ヲ説ク、晷既ニ移リ、遂ニ會ヲ觀ズ、又羅山ガ同門ノ人、菅得菴、歲暮羅山ニ謂テ曰ク、余未ダ通鑑綱目ヲ讀マズ、先生明春ヲ以テ余カ爲メニ之ヲ講ゼヨト、羅山曰ク、子が心誠ニ之ヲ求ムバ、何ゾ來年ヲ待タント、即チ除日ヲ以テ講ヲ起ス、櫻所子曰ク、慶元ノ時代、三尺ノ劍ヲ以テ身ヲ立テ家ヲ興ス者、數フルニ勝ユベカラズ、而シテ羅山道春、獨リ孔孟ノ道ヲ唱ヒ、遂ニ民部卿法印ト爲リ、乘輿城ニ入ルヲ聽ス、特旨ヲ承クルニ至ル、之ヲ我邦ノ叔孫通ト謂フモ可ナリ、其老ニ至テモ、勤勉倦ムヲ知ラズ、除日ヲ以テ講ヲ開キシガゴトキ、後進ノ士ガ懶惰ヲ鑒スルノ藥石ト爲スベキナリ、



第六 山崎嘉右衛門三樂ヲ語リシ事

山崎嘉右衛門、闇齋ハ其號ナリ。京都ノ人木下侯ニ仕テ、闇齋始テ江戸ニ到ル。寒、窶ニシテ、儋石無シ。故テニ書商ニ鄰ツテ賃居シ。以テ其書ヲ借閱ス。是時ニ當リ、井上侯學ヲ好ミ、士ニ下ル。書商モ亦數謁見ス。一日侯商ニ謂テ曰ク、寡人マサニ學バントス。爾ガノ知ル所、人ノ師トスルニ足ル者アラバ、請フ為メニ紹介セヨト。曰ク、近ゴロ一儒生、山崎嘉右衛門トイフ者アリ。京師ヨリ來テ、小人ノ東家ニ住ス。其以テスル所ヲ視ルニ、尋常ニ度越ス。閣下ニシテ之ヲ召サバ、其不虞ノ幸福ヲ得ルナリ。豈ニ感奮シテ恩ニ答フルヲ思ハザランヤト。侯大ニ喜ビ、乃チ延致セシム。商歸テ闇齋ニ告テ、闇齋毅然トシテ曰ク、侯道ヲ問ハントセバ、則チ先

ツ來リ見ヨト。商憮然トシテ以爲ク、措大時勢ニ通ゼズ。若シ此ノゴトキ人ヲ薦メバ、必ズ上ヲ凌ギ法ヲ無ミシ。累自カラ及バン。薦メサルニハ若カスト。他日侯復々問テ曰ク、疇昔告グル所ノ山崎生ハ如何ント。商曰ク、小人惰ルニ非ルナリ。前日既ニ命ヲ渠ニ傳フ。渠曰ク、侯先ツ來テ余ヲ見ヨト。是頑愚ニ非レバ、即チ狂率名ヲ邀ムルナリ。請フ別ニ通儒ヲ選ベト。侯咨嗟良久フシテ曰ク、方今師儒ト稱スル者多クハ道ヲ行フニ意口無シ。東奔西走、其技ノ售レ易キヲ欲ス。而シテ孤之ヲ聞ク。禮來學ヲ聞ク。往教ヲ聞カズ。山崎生能ク之ヲ守ル。此ハ乃チ真儒ナリト。即日駕ヲ命ジテ其居ヲ訪フ。其筆、驚權貴ニ屈セザル。概ネ此類ナリ。闇齋ノ學、初ノ專ラ瀝洛ヲ祖トシ、晚ニ及テ吉川惟足ニ從ヒ、神道



ヲ學ビ遂ニ一家言ヲ立ツ其學大ニ世ニ行ハレ前後贊ハ  
執ル者六千餘人車馬門ニ滿ツ

會津侯嘗テ闇齋ニ問テ曰ク先生樂ミアルカ答ヘテ曰ク  
臣ニ三樂アリ凡ソ天地ノ間生アル者何ゾ限ラン而シテ  
萬物ノ靈タルヲ得ル一樂ナリ天地ノ間一治一亂定數無  
シ而シテ右文ノ世ニ生レ書ヲ讀ミ道ヲ學ビ古ノ聖賢ト  
臂ヲ一堂ノ上ニ把ルヲ得ル一樂ナリ是レ臣ガ樂ミトス  
ル所ナリト侯曰ク二樂ハ既ニ之ヲ聞クヲ得タリ請フ  
亦其一樂ヲ聞カント曰ク此レ其最モ大ナル者ニシテ言  
ヒ難キ所以ノ者ハ君侯必ズ信ゼズ以テ毀譽誹謗ト爲サ  
ント侯曰ク寡人不敏ナリト雖モ先生ノ言ヲ奉ジ致ワト  
シテ諫メヲ求メ忠言ヲ渴聞ス何ゾ今ニ至テ教ヘテ終ハ

ラザリトヲヒンヤト曰ク君ハ言此ニ及ブ某假令戮辱ニ  
逢フモ豈ニ言ヲ盡サランヤ所謂某ガ樂ノ最モ大ナル  
者ハ幸ニ卑賤ニ生レテ侯家ニ生レリ是ナリト侯曰ク  
敢テ問フ何ゾヤ曰ク意フニ今ノ諸侯タルヤ深宮ノ中ニ  
生レ婦人ノ手ニ長ジ不學無術聲色ニ徇ガヒ遊戯ニ耽テ  
リ而シテ之ガ位タル者ハ主意ヲ迎合シ其爲人所ハ因テ  
之ヲ稱譽シ其爲サイル所ハ因テ之ヲ非毀シ遂ニ卒然ノ  
性ヲシテ措亡消滅セシム其卑賤ノ幼ニシテ辛苦ヲ嘗メ  
長ジテ事務ニ習ヒ師教ヘ友輔ケ以テ其智慮ヲ益ス者ニ  
視ブレバ何如ト爲スヤ是レ某ガ卑賤ニ生レテ侯家ニ生  
レザルヲ樂シノ最モ大ナリトスル所以ナリト是ニ於テ  
侯茫然トシテ自失シ嘆息シテ曰ク誠ニ先生ハ言ハ如シ



ト。

櫻所子曰ク、今、少年、動モスレバ、輒チ曰フ、吾學ニ志スト、  
 雖、氏學、資無ク、大都ニ赴テ、研精スルニ、由無シト。或ハ曰フ、  
 良師無キニ、非ズト。雖、氏書ヲ買フノ、資無キヲ、奈何センヤ  
 ト。而シテ、富貴、榮達ヲ慕フ、飢渴ノ、飲食ニ、於ケルヨリモ、甚  
 シク、業未ダ、熟セズ、學未ダ、成ラズシテ、早ク、既ニ、禄ヲ求ム、  
 微官薄俸ニ安ンズル者、多カラズトセズ、之ヲ、樹木ヲ、木  
 長ゼザルニ、伐リ、菓實ヲ、未ダ、熟セザルニ、擷スルニ、喻ス。豈  
 惜ンカラズヤ。視、曰、前哲先輩ノ、寒劣ニ、生長シテ、名ヲ成シ、  
 家ヲ興スモノ、多ク、富貴ニシテ、學識、富贍ナル人、少キトテ、  
 闇齋ノ、如キハ、其貧窶隣ヲ、書肆ノ、傍ニトシ、其書ヲ、借贖ス  
 ルモ、屹然トシテ、守ル所アリ、敢テ、權貴ノ、人ニ、屈セズ、卑賤

ニ生レテ、富貴ニ生レザルヲ、以テ、樂ミ、最モ、大ナル者ト  
 スルガ、如キ。其志操ノ、堅忍不拔ナルヲ、見ルニ、足レリ。而シ  
 テ、其天性、峭嚴ニシテ、師弟ノ、間儼トシテ、君臣ノ、如ク、教ヘ  
 ヲ受クル者、貴卿巨子ト雖、氏之ヲ、眼底ニ、置カズ、書ヲ、講ズ  
 ル音吐、鐘ノ、如ク、面容、怒ルガ、如ク、聽衆、凜然トシテ、敢テ、仰  
 デ、見ズ、門生、毎ニ、竊カニ、相告ゲテ、曰ク、吾儕、未ダ、枕儼ヲ、得  
 ズ、情欲ノ、感時ニ、動キ、自ラ、制スル能ハズ、則チ、瞑目シテ、先  
 生ヲ、一、想スレバ、欲念頓ニ、消シ、寒カラズシテ、慄スト。以テ、  
 其素行ノ、如何ヲ、知ルニ、足レリ。歐人ノ、諺ニ、曰ク、奴僕ノ、目  
 ニ、英雄無シト。是、英雄、豪傑ト雖、氏、平素ノ、行爲ニ、於テハ、自  
 カラ、其短所ノ、掩フ可カラザルアルヲ、謂フナリ。然ルニ、日  
 ニ、其講帷ニ、侍スルノ、門生ニシテ、猶ホ、此ノ、如シ、翁ノ、養フ



所知ルベキナリ。然レ氏闇齋モ亦人ナリ。後進ノ君子之ヲ  
勅。ヨ。...

第七 伊藤仁齋赤貧ニシテ苦學セシ事

伊藤仁齋ハ京都ノ人。家素ト賈ヲ業トス。仁齋幼キヨリ穎  
異挺發。群兒ニ異ナリ。其始ハ句讀ヲ習ハ時。意已ニ儒ヲ以  
テ一世ニ焜耀セント欲ス。稍長ズルニ及ビ。堅苦自ラ勵ム。  
親戚以テ利ニ迂ナリト爲シ。皆ナ之ヲ沮ンデ曰ク。學問ハ  
是レ彼邦ノ事ナリ。此邦ニ在テハ固ヨリ無用ニ屬ス。假令  
之ヲ能クスルモ。售レ易マカラズ。如カズ。醫術ヲ爲シ以テ  
生産ヲ致サンニハト。仁齋從ハズ。而シテ家日ニ衰謝ス。沮  
ム者愈止マズ。而シテ其志確乎トシテ變ビズ。其遂ニ赤貧  
ニ至ルヤ。歲暮糲糲ヲ買フ。丁能ハズ。亦曠然トシテ以テ意

トセズ。妻跪キ進ムテ曰ク。家道育鞠。妾未ダ嘗テ堪エズト  
セズ。而シテ獨リ其忍デミカラザル者ハ。孺子原藏未ダ貧  
ノ何物タルヲ解セズ。人家養アルヲ羨ミ。連リニ求メテ已  
マズ。妾口ヲ能ク之ヲ譙呵スト。雖氏腸爲メニ斷絶スト。言  
訖テ泣下ル。仁齋凡ニ隱リ書ヲ閱ミシ。一言之ガ答ヲ爲サ  
ズ。直チニ其着スル所ノ外。套ヲ脱シ以テ妻ニ授ク。或時左  
右比屋力ヲ戮セテ義井ヲ濬フス。仁齋之ヲ聞キ出テ。共  
ニセント欲ス。衆皆テ曰ク。吾曹之ヲ成セバ足ル。何ゾ先生  
ヲ役スル丁ヲセント。仁齋曰ク。敢テ義ノ辱キヲ謝セガラ  
ンヤ。然リト雖氏余此井ニ汲ム。既ニ衆ト異ナラズ。今豈ニ  
獨リ與カラザルノ理アラシヤト。遂ニ縋テ執テ其勞ヲ分  
ツ。其貧ニ居テ戚マズ。學識高フシテ人ニ驕ラザル丁此ノ



如シ。肥後侯祿千石ヲ以テ之ヲ招グ。辭スルニ母老テ侍養  
 人無キヲ以テス。利祿ノ為メニ其心ヲ動カサズ。亦此ノ  
 如シ。而シテ年六十二垂ントスルマデ家猶ホ寒シ。其生徒  
 ヲ教授スルコト四十餘年。天下ノ學者四方ヨリ來テ之ニ  
 歸ス。國トシテ至ラザルナシ。唯飛驒佐渡壹岐三州ノ人ノ  
 門ニ及バザルノミ。謁ヲ執ルノ士千ヲ以テ數フ。實ニ一代  
 ノ儒宗ト稱スベシ。  
 櫻所子曰ク仁齋ハ市井ノ間ニ生長シ其幼齡句讀ヲ受ク  
 ルノ日早ク已ニ一代ノ儒宗タラントスルノ志ヲ抱キ之  
 ヲ持スルノ堅確ナル親戚之ヲ沮メドモ撓マズ赤貧骨ニ  
 徹ス。其戚マデ千石ノ俸祿ヲ以テスルモ動カズ。春臺ノ  
 所謂仁齋ハ豪傑ノ士ナリ。所謂文王ヲ待タズシテ作ルモ

ハナリトハ。溢言ニ非ルナリ。世或ハ其家政ニ迂ナルト花  
 街ヲ過テ花街ナルコトヲ覺ラザリシ事トヲ以テ。世事ニ達  
 セザルヲ嗤ル者アリト雖也。是未ダ大小輕重ヲ知ラサル  
 者ノ言ノミ。逐々トシテ日ニ縮録ノ利ヲ窮セ。若シハ大都  
 花柳ノ地ヲ諳ンズルモ身ヲ修メ家ヲ齊フルコトヲ知ラス  
 ンバ。是其重且大ナル者ヲ棄テ。小且輕ナル者ヲ取ル者  
 ノ也。何況ヤ仁齋ノ如キ。學師博ニ由ラズシテ。徳川氏以來  
 儒學ノ嚆矢ナリ。躬行恭謙ニシテ。立春ノ夕ベ必ズ禮服  
 ヲ着ケテ炒豆ヲ撒セ。其地ヲ過ギ其主ヲ禮セズ  
 シテ可ナランヤトテ。梵刹ヲ過ギ佛像ヲ見レバ。即チ拜セ  
 シガ如キ。細瑣ノ事ト雖也。亦敢テ輕忽ニセズ。其篤實温厚  
 中江藤樹ヲ除クノ外。亦見ザル所ニシテ。學者修身ノ模範



トスベキ碩儒ナルヲヤ

第八 三宅重固獄ニ在テ書ヲ著セシ事

三宅重固ハ尚齋ト號ス播磨ノ人ナリ年十九ニシテ山崎  
闇齋ノ門ニ入り專ラ儒學ヲ攻ム後チ江戸ニ遊ビ辟ニ阿  
部侯ニ應ズ元禄中將軍綱吉公侯ノ邸ニ臨ス重固ニ命ジ  
テ論語ヲ講ゼシム乃チ衣服ノ賜アリ其官ニ在ル忠直務  
メテ其誠ヲ盡クス居ル一十年言行ハレザルヲ以テ疾  
移シテ致仕ヲ乞フ允サレズ猶小數乞フテ止マズ是ヲ以  
テ罪ヲ得武藏國忍ニ幽囚セラレタリ重固其囹圄ニ在ル  
ヤ危難窘迫ノ際之ニ處テ裕如ナリ乃チ謂フ古人刑セズ  
レニ尚ホ能ク書ヲ著ハス吾寧ゾ為ス一無クシテ斃ル  
ヲ待タンヤト然レモ筆墨得バカラズ因テ臂ヲ刺シテ狼

竈録三卷ヲ血書ス侯人ヲシテ重固ヲ察セシム重固即チ  
詩ヲ作テ之ニ示ス其詩ニ曰ク

富貴壽夭不二心但向面前養誠心四十餘年學何事  
獄中鐵石心

其氣象豪爽ナル此ノ如シ獄ニ在ル丁三年赦ニ會フテ放  
タル是ニ於テ去テ京師ニ之キ儒ヲ以テ業ト為シ培根達  
支ノ兩學舎ヲ勘解由坊ニ建テ業ヲ講ス摺紳公侯從游  
スル者甚ダ多カリシト云フ

櫻所子曰ク尚齋ノ獄ニ在ル吾寧ゾ為ス一無クシテ斃ル  
ルヲ待タンヤト血ヲ刺シテ書ヲ著スルニ至リシモ以  
テ其平生ノ志氣如何ヲ視ルニ足レリ怠惰安逸ヲ貪ルモ  
ノハ獨リ明時ノ廢物ノミナラズ亦尚齋ノ罪人ナリ



第九 貝原篤信老テ猶ホ怠ラザリシ事

貝原篤信益軒ト號ス筑前ノ人國王黒田侯ニ仕テ寛永七年ヲ以テ福岡城中ノ官舎ニ生ル篤信幼ヨリ警敏ニシテ殊質アリ中年ニ及ビ京師ニヘテ講學ス都下ノ名彦胥ナ心ヲ傾ケテ之ニ下ダシ博學洽聞ヲ以テ名海内ニ重シ篤信好ムデ書ヲ著ス而シテ世ヲ救フハ心實ニ苦ボロニシテ其著スル所百有餘種多ク書スルニ國字ヲ以テシ語極ムテ懇切ナリ田畷紅女童兒隸卒皆ナ之ヲ使トス又攝生ニ善シ老ニ至テ猶ホ矍鑠トシテ衰ヘズ其屬綴スル所ノモノ少ナカラズ六十二ニシテ和漢名數増補ヲ作り六十七ニシテ大和廻リヲ作り七十四ニシテ筑前續風土記及ビ點例ヲ作り七十五ニシテ諸菜譜ヲ作り七十九ニシテ大

和本舛ヲ作クリ八十一ニシテ樂訓ヲ作クリ八十四ニシテ養生訓又作クル其著スルところ慎思錄ニ謂ヘルコトアリ曰ク魏志ニ曰ク胡昭怡々トシテ愛セザル無シ僕隸ト雖ドモ必ズ禮ヲ加フ年八十二ニシテ書籍ニ倦マザル者胡徵君ニ於テ之ヲ見ルト篤信謂ラク胡昭愛敬ノ德量及ブ可カラズ以テ法ト為ス可シ八十書ヲ讀ムテ倦マザルガ如キハ吾耆老至ナリト雖ドモ亦々日々手卷ヲ釋カズ是レ企及ス可シト為スト此レ篤信自ラ其實ヲ紀スルナリ篤信ノ人タル謙恭純篤ナリ其言ニ曰ク吾幸ニ朱子ノ後ニ生レテ其書ヲ窺フコトヲ得無窮ノ幸又罔極ノ恩ト謂フ可キナリ故ニ吾其之ヲ敬スル神册ハ如ク之ヲ信ズル筈見龜ノ如シト蓋シ其學初メ陸象山王陽明ノ說ニ取リ



後チ朱熹ノ學ニ歸依セシヲ以テナリ。篤信年八十五ニシテ没ス。

櫻所子曰ク。近世ノ人。四十五十二至レバ。輒チ自ラ老ヲ稱シテ。百事為ス能ハザルモノ。如クシ。勉強耐忍ノ氣象無ク。徒ニ給養ヲ兒孫ニ託シ。安逸以テ死ヲ待ツノミ。夫レ人生ハ僅カニ三萬六千日。而シテ年七十二至ルヲ得ル者。古來稀ナリトセバ。年弱冠ヲ過ギザル際ハ幼少ナリトシ。四十ヲ踰ユレハ老衰ナリトシ。其事業ヲ成就スルノ日月。數千日ニ止マル者トスルカ。吁。何ゾ自ラ任ズルノ志ニ乏シキヤ。不幸ニシテ疾病事故アルニ際セバ。一事一業ヲ成サズシテ。草木ト共ニ枯朽センイミ。聞ク歐洲ノ人。年六七十年ル者。數人相會スルアリ。氏語次一モ身體衰弱ノ事ニ及

ブ無シト。我邦人ノ老者相逢フテ。晤語スレバ。必ズ死ヲ待ツノ用意ヲ説クト。全ク反對セリ。是素ヨリ平素攝生ニ意ヲ注ガザルヨリ。眼昏ク齒豁ク。身曲カリ脚重キニ至リ易ク。矍鑠タル者少キニ由ルナル可シト。雖氏抑モ亦其習俗ノ然ラシムル所。老テ猶小勉ム可キ者ト為サズルニ由レリ。篤信其人ノ如キ。博學洽聞。海内無比ト稱セラル。モ自ラ足レリトセズ。年八十二至テ。手恆ニ卷ヲ釋カサリシハ。歐洲ノ博士學匠ニモ羞ダザル可シ。且ツ其朱子ニ於テ。無窮ノ幸罔極ノ恩アリトシ。之ヲ敬スル神明ノ如シト云フ者。今ノ書生ノ其學未ダ熟セズシテ。輒ク人ノ短ヲ拾ヒ。以テ口實ト為シ。先覺者ヲ是非シテ。嘖々スル者ニ比スレバ。日。龍霄壤。當ナラザルナリ。



第十 原尚菴學ヲ嗜ム事

原尚菴ハ京都ノ人ナリ。享保三年ニ生マレ、年五十二ニシテ没ス。儒ニシテ、鑿ヲ兼ネ、清國ノ語ニ通ズ。鑿ヲ以テ、土井侯ニ仕フ。尚菴幼ニシテ、雋異、十歳ニシテ、章句ヲ伊藤東涯ニ受ク。漸長ジテ、學ヲ嗜ム。丁飢渴、如シ、口誦、手録、晝夜廢セズ。父母内チ之ヲ奇トシテ、其或ハ疾ヲ得ルヲ過慮ス。謂テ曰ク、帷ヲ下シ、憤リナ、發スルハ成人ノ事ナリ。兒今童年、惟學間斷無クシテ可ナリト。尚庵曰ク、發起シテ文字ヲ尋思スレバ、心下鬆爽ナルヲ覺ス。稍晏レバ、則チ頭空々トシテ、心裏甚ダ安カラズト。其長ズルニ及ビ、博學能文、家資亦頗ル富ムニ至レリト云。

櫻所子曰ク、世ノ學業ニ刻苦スル者、間之ガ爲メニ疾ヲ醸

シ。遂ニ救藥ス可カラザルニ至ル者アリ。是其軀幹ノ柔弱ニ由ルモノナルベシト。雖氏、抑モ亦夕學ニ苦ムテ、未夕學ヲ嗜ムニアラザルヲ以テナリ。尚庵ノ如キハ、學ヲ嗜ムノ深キ者ト謂フ可シ。諺ニ言フ、之ヲ嗜ム者ハ之ヲ爲スノ巧妙ナル者ナリト。尚庵ニ於テ我モ亦言フ。

第十一 澤維顯遊戯ヲ好マサリシ事

澤維顯琴所ト號ス。近江ノ人ナリ。井伊侯ノ世臣タルヲ以テ、琴所亦歳十四ニシテ、祿三百石ヲ襲テ、近侍ト爲ル。侯ニ從テ、江戸ニ在ル三年、元祿中疾ニ由テ致仕シ。京都ニ遊學シ、門ヲ杜チ、客ヲ謝シ、書ヲ讀ミ、力學スル。丁七八年、中年ニ及ビ、松雨亭ヲ彦根城ノ南松寺村ニト築シ、徒ヲ聚メ、書ヲ講ス。衡門ニ棲遲スト。雖氏從遊ハ盛ナル未ダ曾テアラザ



ル所ナリ、農夫奴婢ニ至ルマデ、皆琴所アルヲ知ラザル者  
無カリシト云フ、初メ琴所ノ江戸邸ニ在ルヤ、衆ニ異ナル  
所アリ、凡ソ藩國ノ士大夫江戸ニ祇役シ、邸ニ寓スル者大  
抵周歲ニシテ交代ス、其未々代期ヲ得ザレバ、公署ニ朝夕  
シ職掌ニ從事ス、出入限リアリ、勞ヲ極メ力ヲ窮メ、以テ一  
日ヲ過グ、土ヲ懷フノ情、親ヲ思フノ心、念々已マズ、以テ代  
期ヲ俟ツ、故ニ其公ヨリ退テ舍ニ在ルヤ、或ハ茶ヲ品シ味  
ヲ愛シ、或ハ局ヲ引テ勝ヲ争ヒ、或ハ器ヲ玩ビ物ヲ弄シ、百  
ノ遊戯未々以テ日ヲ消シ、悶ヲ遣ルニ足ラズ、乃チ朋類ヲ  
延キ、醉飽歌呼シ、謔浪笑教シ、放歌起舞シ、喧呶紛擾シ、四隣  
ヲ駭驚ス、往々是ニ由テ譴責ヲ致シ、罪ヲ蒙ル者アリ、蓋シ  
百邸一轍、他事アル丁無シ、琴所僅カニ弱冠ニシテ、既ニ此

ニ見ルアリ、公退ノ後チハ讀書是レ勉ム、講習ノ間朋類來  
テ勸ムルニ遊戯ヲ以テスレバ、辭スルニ睡ヲ好ムヲ以テ  
ス、白晝ト雖、枕ヲ高フシテ寢ニ就ク、其志ヲ學業ニ專ラ  
ニセシト、此ノ如クナリシト云フ、  
櫻所子曰ク、琴所カ睡ヲ好ムヲ以テ明類ヲ謝絶セシト、井  
上蘭臺ガ不在ヲ以テ客ヲ謝ストハ、昔時學者ノ分陰ヲ惜  
ミ、日夜孜々トシテ學習セシメ見ルニ足レリ、夫レ人公ニ  
奉スルト私ヲ營ムトニ論無ク、皆各自ノ職務アリ、本務ノ  
餘暇ヲ以テ書ヲ讀ミ、學ヲ究メントスレバ、人ト談笑シ、飲  
酒博局ヲ事トスルヲ得ズ、今ヤ公ニ私ニ各自ノ職務ニ從  
事シ、各自ノ營業ニ朝夕シ、出入限リアリ、勞ヲ極メ力ヲ窮  
ムル者、太ダ多シ、而シテ其家ニ歸ルヤ、乃チ朋類ヲ延キ、醉



飽歌呼シ、謔、笑、教スルノミナラズ、袂ヲ連ネテ花街ニ散  
 歩シ、車ヲ列ネテ柳巷ニ逍遙シ、殆ンド虚日無キニ至ル者  
 アリ、其甚シキハ青年ノ書生ニシテ、猶ホ其弊ニ倣フモノ  
 アルニ至ル之ヲ昔時ノ士人ガ、東邸ニ駐在スルノ景状ニ  
 比スレバ、更ニ甚シキヲ加フト云フモ、太過無カルヘシ、其  
 家ニ歸テ勤勉書ヲ讀ミ、琴所其人ノ故智ヲ襲フ者無シ、益  
 シ之レアラシ、吾未ダ之ヲ見ザルナリ、宜ナル哉、圭運旺盛  
 ト稱スト、雖凡學ニ邃キ人ノ寥寥タル、晨星ノ如クニシテ、  
 品行方正ノ君子、亦マサニ地ヲ掃ハントスル、後進ノ士、  
 幸ニ其志ヲ堅確ニシテ、遊戯ニ耽ケリ、酒色ニ溺ル、ノ習  
 弊ニ薰染セラレ、勿レ、

第十二 井上嘉膳戸ヲ閉チテ書ヲ讀ミシ事

嘉膳名、熙蘭臺ト號ス、江戸ノ人、幼キヨリ學ヲ好ミ、弱冠  
 ニシテ天野曾原ニ從ヒ、既ニシテ林鳳岡ノ門ニ入ル、元文  
 五年、辟ニ備前侯ニ應ジ、教授ノ職ニ任ス、蘭臺戸ヲ閉チテ書  
 ヲ讀ム、客ノ至ルアレバ、則チ自ラ答フルニ不在チ、以テス、  
 客以テ戲レト為ス、蘭臺聲ヲ勵マシテ曰ク、主人自ラ答フ  
 ル、此ノ如ク、何ノ偽リカ之レアラント、書ヲ讀ムテ、輟マ  
 ス、

櫻所子曰ク、蘭臺ガ村正舒ニ答フル書ニ、熙幼ニシテ、孤貧、  
 師保、訓無シ、然ルト雖、凡詩ヲ誦シテ、雅頌ナルヲ知リ、書  
 ヲ讀ムテ、堯舜アルヲ知ル、然ル後チ、困學二十年、一日ノ如  
 シト云フ、以テ見レハ、苦學、勉勵セル思フ可キナリ、而シテ  
 學業成熟、後チト雖、凡戸ヲ閉チテ、來客ヲ謝スルニ不在



ヲ以テス其聲ヲ勵シテ自ラ答フル者。間話ヲ爲シテ貴重ノ光陰ヲ消費セシコトヲ懼ル、ノ切ナルヲ見ルニ足レリ。而シテ其主人自答ス何ノ偽リカ之レアラント云フモ人亦敢テ構思以テ人ヲ欺クコトヲ爲サズ其易直ノ性質ヲ想像スルニ堪タリ世ノ名ヲ交際ニ托シ飲酒博局ヲ事トシテ分寸以テ黄金ニ値スベキ光陰ヲ徒消スルヲ愛マズ而シテ動モスレバ不在ト稱シテ巧ミニ來客ヲ謝スルガ如キ爲ス所全ク蘭臺ト反對シテ其怠惰ト不信トヲ表スルニ足ルモノナリ

第十三 伊藤莊治古語ヲ壁ニ貼シテ自ラ警メシ事

伊藤莊治ハ錦里ト號ス播磨赤石ノ人ナリ其祖祖庵其父龍州共ニ儒ヲ以テ名アリ錦里家庭ニ學ビ經藝ヲ以テ發

トニ都門ニ著聞ス蓋シ其父祖ヨリ三世箕裘相繼ギ後進ニ領袖タルヲ以テ之ヲ奉崇スル者尤モ衆ホシ錦里資性慎重ニシテ名ヲ好マズ謂ヲ請フ者アリト雖モ贊ヲ執ル者ニ非レバ概シテ之ヲ謝絶ス以謂ラク博交泛遊人皆其名ヲ好ムガ爲ナリト其越前侯ニ仕フル殆ンド四十餘年數江戸若クハ福井ニ祇役スト雖モ奉職惟レ謹ミ外交ヲ爲サズ其休暇シテ京都ニ在リ經義ヲ講説シテ徒ニ授クルニ當テ是闕ヲ履マズ習俗應酬ノ詩文ヲ爲クラズ而カレ氏其名ハ遠ク時輩ハ騷雅博交ヲ以テ藝苑ニ鳴ル者ハ右ニ出タリト云フ錦里居ル所ハ室壁上ニ志士不忘在溝壑ハ孟子ノ語ヲ書キ以テ自ラ警ム常ニ子弟ニ訓ヘテ曰ク士タル者ハ此ヲ念ハザル可カラズト



櫻所子曰之善イ哉錦里ノ記交ヲ謝絶シテ且ツ常ニ自ラ  
 警ムルヤ馬場美濃守ガ戰場常在ノ四字ヲ書シテ壁頭ニ  
 掲ゲ平生自ラ警メシハ則チ勇士ハ其元ベヲ喪フイヲ忘  
 レザルナリ本庄因幡守ノ封侯ヲ得テ後チ青錢五十文ヲ  
 繕ニ貫キテ柱上ニ懸ケ三本入ノ扇子箱之事ノ九字ヲ書  
 シテ壁ニ貼セシハ貴ニ居テ賤ヲ忘レザル為メニ設ケシ  
 ナリ本庄因幡守家俊ハ登庸セラレ侍從ニ任ジ室間ニ  
 封セラレ當時ノ顯貴ニナリ後チ其夫人ヲ為シテ  
 家俊恭儉ニシテ慎重ナリ恒ニ朝餐ノ後チ其夫人ヲ  
 茶三碗ヲ供ヒシメ且ツ誠ニ遺忘スベカラズ其居ル所  
 必ズ曩時寒微ナリシメ且ツ誠ニ遺忘スベカラズ其居ル所  
 宅錢五十文ヲ綴リ貫キテ柱上ニ貼付セリ親友或時其  
 之事ト書キタル紙ヲ壁ニ貼ヒ懸ケ又三本入ノ扇子箱  
 命家俊答ヘテ曰ク我處士タリシ時關東ニ來ルベシト問  
 教命アリシヲ以テ三本入ノ扇子箱ヲ關東ニ來ルベシト  
 齋ラシテ謝儀トセシト欲シ御影堂ニ至リ扇ヲ買ハシ  
 フヲ得ハヒト僅カニ五ト主人既ニ我力身事ヲ知リタル

ヤ扇ハ價ヲ論ヒテ好ハ所ニ隨テ多ク取ラルル者カト  
 ナシト云フ此時茂ハ關東ノ威光スノ如クハ者ノ如何ヲ  
 思ヒシガ今ハ富貴ニシテ錢ト云ヒ扇トイフ者ノ如何ヲ  
 知ラザレニ至リ本庄ノ懼ル故ニ曩日ノ事ヲ記念シテ  
 流ルガ爲メト返ニ柱頭壁上一掲ゲテ目ニ遮ルヲ要スル所  
 ルカ爲メト語ラ世ノ志士タル者恒ニ溝壑ニ在ルヲ忘ル  
 レシトイフ空穀虚譽之利浮榮ニ奔兢スルイヲ爲サスハ  
 一ヲ懼レ空穀虚譽之利浮榮ニ奔兢スルイヲ爲サスハ  
 以テ其志ヲ挫ギ其節操ヲ撓ハメテ廉耻ノ何事タルヲ顧  
 ミズ人ニ向テ憐ミヲ乞ヒ脅肩諂笑スルノ醜態ヲ現ハス  
 一無キヲ庶幾ス可シ然リ而シテ豪傑ノ士ト雖逢フ所  
 ノ境ニ隨テ或ハ其心志ノ變移スル無キ能ハス故ニ錦里  
 ノ為ス所ノ如キハ頗ル初志ヲ保續シテ黽勉スニ從事ス  
 ルタメノ良策ニシテ馬場本庄二氏ノ為ス所ト暗合セル  
 亦奇ナラズヤ



第十四 加々美光章線香ノ光コト書ヲ讀ミシ事  
加々美光章ハ櫻塙ト號ス甲斐國山梨郡ノ祠官アリ幼ヨ  
リ學ヲ好ミ國典ハ言フヲ待タズ儒經釋典天文曆數算術  
等通曉セザルハ無シ國風ハ風竹亭ノ翁ヲ師トシ文學ハ  
三宅尚齋ヲ師トス初メ家貧ニシテ油ヲ焚クハ資無シ之  
ヲ以テ線香ヲ燒キ其光ヲ假テ書ヲ讀ム業成ルニ及テ  
名聲四方ニ聞エ其門ニ遊ブ者甚ダ多シ光章天性勤勉ナ  
ル既ニ此ノゴトク加フルニ氣質温厚ニシテ行ヒ篤敬ナ  
ルヲ以テ一言ヲ交ユルモノト雖比歸服景仰ヒザルハ無  
カリシト云フ

櫻所子曰ク光章ノ學業ニ黽勉セル車胤孫康ニ比スルモ  
亦敢テ慚色無シ高堂ノ銀燭明カニシテ晝ノ如ク唯笙歌

ヲ照シテ書ヲ照ラサズ或ハ雪ヲ積ミ螢ヲ聚メ或ハ線香  
ヲ焚キ以テ書ヲ照ス其勞逸苦樂相去ルヲ遠シ然リト雖  
比其結菓ニ就テ對較ヒバ高樓置酒シテ銀燭舞裙ヲ照ス  
ノ逸樂ヲ事トスル者或ハ破産喪家ニ至リ芸窓ノ下書ヲ  
讀ムテ僅カニ凍餓ヲ免カルノ勞苦ヲ憚ラザル者他年  
或ハ高蓋四輪大達ニ來往スルノ富榮ヲ取ル古人言ヘル  
トアリ曰ク難キヲ先キニシテ得ルト後チニスト世ノ  
得ルトヲ欲シテ難キヲ辭セントスル者省思セズンバア  
ルベカラズ

第十五 神屋彌左衛門文武ニ兼通セシ事

神屋彌左衛門毅齋ト號ス筑前福岡侯ノ世臣ナリ著スル  
所歸鞍吟艸二卷アリ其記スル所ニ據テ視レバ同僚ノ士



病ニ東邸ニ卧シ。候駕ニ從テ歸ルヲ得ズ。候毅齋ヲシテ看  
護セシム。他日其病痊ハ相伴テ西海ニ歸ル時ノ紀行ナリ。  
歸程鎌倉江ノ島等。沿途ノ勝概ヲ遊觀シ。之ヲ詩ニシ之ヲ  
文ニス。其懐古弔舊スル所。史傳ニ涉リ議論ヲ加フ。其人ノ  
文ニシテ武ナル儒ニシテ釋ニ通ズルノ一斑ヲ知ルニ足  
レリ。即チ卷初二四分律（釋典ノ名）膽病ノ五功德ヲ舉  
ゲ。梵網經八福田中看病ヲ第一トスルヲ述ブルガ如キ。  
是ナリ。而シテ其詩其文亦卓然トシテ一家ヲナセリ。卷首  
享保戊戌夏宅觀瀾ノ序。同庚子夏四月。物祖徠ノ序。正徳乙  
未歲釋大潮ノ序アリ。觀瀾曰ク。其覽ハ富識ハ偉辯ハ雄ニ  
シテ文ハ宏且ツ暢ナル。固ヨリ優然トシテハ通邑大都  
ニ坐シ。絳帳ヲ褰ゲテ青衿ヲ導ク者ト相周旋下上スルニ

足ル。且ク一郷ノ士ヲ以テ之ヲ視ルベキニ非ズト。又曰ク。  
雲天千里首ヲ翹ゲ悠々トシテ徒ニ其名ヲ仰テ親ク其誨  
ヲ受クルヲ得ズ。是恨ミトス。メキナリト。祖徠曰ク。蓋シ其  
人文武自ラ負ヒ。經生ヲ以テ自ラ見ズ。百氏ニ馳騁シ千古  
ヲ凌厲シ。玄ヲ出テ釋ニ入り。奇正雲湧ス。其才洵ニ測ル可  
カラズト。又曰ク。然レ此レ彼レニ往クヲ得ルナシ。彼レ  
來ル能ハズ。各天ニ匏繫ス。徒ニ其冒宇ヲ此編ニ想フ。恨々  
カラザル可ケンヤト。大潮ノ序ニ曰ク。其言ヲ觀其安シス  
ル所ヲ察スレバ。蓋シ神氏ハ宋ノ蘇長公ノ流亞歟。既ニ武  
亦儒亦釋。其學ニ非ルハ無シ。吾之ヲ吟呻ニ知ルト。序者ニ  
人皆當時ノ英俊ニシテ。各推獎ヲ極ムルヲ此ノ如クナル  
亦以テ毅齋ガ傑出ノ人タルヲ知ルニ足レリ。而シテ卷



中自ラ幼年ヨリ研學セシヲ叙ス亦以テ其刻苦勉強終  
ニ造詣スル所アルヲ見ルベキヲ以テ煩ヲ憚カラズ左ニ  
之ヲ抄出スベシ即チ吟艸上ニ曰ク憶フ予年十五六家貧  
フシテ書ヲ嗜ム偶一書ヲ得バ則チ拜戴シテ珍寶ヲ獲ル  
ガ如クシ披翫寢食ヲ忘ル既ニシテ微官ニ奔走シ屢東都  
ニ迄ル書肆某ト歛密ナリ暇アレバ則チ書肆ニ入り閣上  
ニ坐ス四壁緋帙磊落棟ニ充ツ意ニ隨テ抽出シ仰テ讀  
俯シテ思フ稍飢ユレバ懷中搏飯ヲ取テ之ヲ喫ス其樂  
シ食前方丈侍妾數百人ト雖凡易エザルナリ歸ルニ臨ミ  
必ズ書一套ヲ借リ携ヘ歸ル晝間塵冗率ネ卷ヲ終フル能  
ハズ夜ニ入テ展讀旦ニ達シ尚小手ヲ釋クニ忍ビズ云々

櫻所子曰ク享元ノ世圭運勃興シ人文ノ淵藪タリ而シテ  
龍騰鳳翥名ヲ後世ニ垂ルハアリ其名ノ高キ其實ニ過ク  
ルアリ學問文章志氣節操兼ネ備ハリ其名ノ湮滅シテ聞  
ユルコト無キアリ韜光隱德ノ士巖穴ニ老死シ世ヲ畢フ  
ルマデ人ノ之ヲ知ルナキ和漢其例多ク黃鐘棄擲セラ  
レテ瓦釜雷鳴スルハ古今社會ノ通患ナリ刻苦力學遐陬  
ニ潛居シ坎軻身ヲ終フ毅齋ノ如キ其人ナリ然リト雖凡  
ニ卷ノ吟艸彩華ヲ煥發シ三人ノ知己ヲ得テ榮光益灼カ  
ナリ毅齋ガ平素勤勉ノ効マタ空シカラズト謂フベシ  
第十六 中西維寧恆ニ寢ニ就ク丁無カリシ事  
維寧通稱ハ曾七郎參河ノ人ナリ尾藩竹腰氏ニ仕フ維寧  
弱冠ニシテ學ニ志シ暗室ニ坐スルヲ好ム白晝ト雖ドモ



戸ヲ閉テ僅カニ容光ニ照シテ書ヲ讀ミ夜ハ燈檠ニ對シ  
 毎ニ鷄鳴ニ至ルマデ凡ニ隱テ坐睡ス以テ平生ト為シ竟  
 二寢ニ就ク了無シ歲三十二至ル弟子日ニ進ミ門ニ遊ブ  
 者數十百人幾クモ無クシテ名護屋ニ移ル寛延中其主竹  
 腰氏ニ從ヒ江戸ニ赴ク竹腰氏ノ邸ハ赤阪門外ニ在リ維  
 寧邸ノ官舎ニ寓ズ來テ業ヲ請フモノ靡クトシテ已マズ  
 遂ニ命ジテ邸ヲ出デ、都下ニ寓居セシム博ク四方ノ士  
 二教授スルタメニ費銀ヲ賜與セラレ是ニ於テ講堂ヲ芝  
 三島坊ニト築シ叢桂舎ト云フ竹腰氏事アレバ則チ吏ヲ  
 シテ之ニ就テ咨問セシム議政ノ事ニ非レバ敢テ召サズ  
 召セバ必ズ駕ヲ以テス恩遇太ダ厚シ而シテ四方ハ士風  
 二嚮テ輻湊シ其聲譽時ニ聞ユ維寧敦厚沈黙人ト競ハズ

交遊極メテ寡ク盛名有リト雖氏行ヒ本ニ由ラザル者ハ  
 辭シテ之ヲ見ルナシ恆ニ名節ヲ以テ人ヲ勵ゲマス其涵  
 濡ノ化自然ニ門人ニ及ビ其才ヲ育シ德ヲ養フ即チ博綜  
 練達就鳥東柯ノ如キ雅量淹通飛圭洲ノ如キ捷敏廉節河天  
 門ノ如キ篤學謹行紀平洲ノ如キ信恆直諒伊東冠峯ノ如  
 キ皆ナ得易スカラザル所ニシテ世儒ノ偏ニ文藝ノミヲ  
 以テ後進ヲ鼓動スル者ト迥カニ異ナリ維寧病篤キニ至  
 リ弟子ヲシテ之ヲ扶起セシム凡ニ隱テ尚ホ講ヲ輟メズ  
 將カニ起ガラントスルヲ知リ筆スル所ハ著數本ヲ舉ゲ  
 テ悉ク之ヲ燒カシム弟子皆之ヲ惜ム乃チ曰ク未定ハ書  
 ナリ恐クハ後世ヲ誤ラント僅ニ文集十三卷ヲ以テ之ヲ  
 紀平洲ニ屬シ遂ニ寶曆二年七月ヲ以テ芝三島坊ノ寓ニ



歿ス。歳四十四。弟子多ク心喪テ服スト云フ。櫻所子曰ク。維寧ノ學ニ志シ。凡ニ隱テ坐睡シテ寢ニ就カザリシヨリ。其病篤キニ及ビ。尚ホ凡ニ隱テ講ヲ輟メザリシト云フ者。其少ヨリ死ニ至ルマデ。篤志力學。終始一ク如クナルヲ見ルニ足レリ。然而シテ名節ヲ以テ人ヲ勵マシ。泛交ヲ好マズ。筆スル所ノ著數本ヲ焼クガ如キ。其敦厚恭謙ナルノ一斑ヲ窺フニ足レリ。且ナル哉。一時ノ名儒多ク其門ヨリ出デタリシ。今世ノ學者。其篤志力學。尋常ニ超出スル所無クシテ。聲譽ヲ一世ニ馳セントス。猶ホ貨物ヲ有スル。丁多カラズシテ。貿易市場ニ巨利ヲ攫セントスルガ如シ。假令之ヲ得ルモ。一時ノ虛名空譽。ミタク恃ムベキモノニ非ズ。

第十七 蘆野孝七郎幽囚ヒラレテ書ヲ著ヒシ事

孝七郎ハ東山ト號ス。元禄九年。陸奥ノ磐井郡詩井村ニ生マル。家世農桑ヲ業トス。東山四五歳ニシテ。稗史ヲ見ル。好シ。九歳ノ時。桃井素忠ニ從テ。句讀ヲ受ク。一年ニシテ。四書五經ヲ讀了ス。稍長ズルニ及ビ。仙臺ニ遊ビ。富商大和屋久四郎ノ家ニ寓ズ。江戸ノ人吉田需軒ト云者。仙臺ニ遊ビ。惟ヲ下ダシテ。生徒ニ教授ス。東山從テ。其講ヲ聞ク。丁五年。又京都ニ遊ビ。業ヲ三宅尚齋ノ門ニ受ク。又長崎ニ之キ。講説シテ。徒ニ授ク。其名稍諸儒ノ間ニ顯ハル。仙臺中將吉村遙ニ召シテ。儒官ト爲シ。祿若干ヲ賜フ。時二年二十六。東山府學ヲ設ケン。丁ヲ建議ス。富商鈴木八郎左衛門。其事ヲ聞キ。金二萬兩ヲ出シテ。興造ノ費資ヲ助ケント請ス。八郎左



衛門ハ嘗テ東山ニ學ブ者ナリ東山之ヲ大夫ニ言フシ遂  
 ニ國侯ニ上疏ス侯之ヲ許可シ經營區畫各壯大ヲ盡クシ  
 穰穰碩瓦皆宏麗ヲ極ハム三年ニシテ成ルヲ告グ區シテ  
 明倫堂ト曰フ仙臺府學ハ盛ナル諸藩ニ過タルモ其端  
 ハ實ニ佐久間洞巖ト東山ハ創始スル所ナル東山資性剛  
 直ニシテ權要ヲ避ケズ嘗テ學舎ニ於テ諸有司ト其班次  
 ノ高昇ヲ爭フアリ東山捍言シテ曰ク經筵ノ習儀ハ鄉  
 等ヲ待タズ執法大夫ト雖氏此事アル無シト有司答フル  
 一無クシテ去ル後チ之ヲ啣シ効スルニ藩制ヲ侮蔑シ舊  
 典ヲ遺棄スルヲ以テス遂ニ之ガ爲メニ坐セラレ加美郡  
 宮崎村石母田長門ガ郡中ニ幽囚セラル其囚所ニ在ルト  
 二十四年赦ニ遭フテ郷里ニ放歸ス時ニ歳六十六東山ハ

幽囚ニ在ルヤ憾ムル所アリテ無刑録十四篇ヲ著シ略秋  
 官ノ遺意ヲ述ブ後チ其書世ニ傳フ識者稱シテ深意アリ  
 ト爲スト云フ東山晚年又仙臺ニ遊ビ生徒ニ教授ス安永  
 五年歳八十一ニシテ歿ス  
 櫻所子曰ク東山邊土僻陬ノ農家ニ生長シテ學ニ志シ千  
 里笈ヲ負フテ良師ヲ求メ汲々トシテ倦怠スルト無ク幽  
 囚セラルト廿四年又敢テ屈撓ノ色無シ書ヲ著シ道ヲ  
 講ジ鐸ヲ一方ニ振フ其篤志力學知ルベキナリ其耐忍剛  
 毅思フベキナリ今日ヲ以テ昔時ト對較セバ書籍ヲ購求  
 スルモ師ヲ求メテ旅行スルモ舟車ノ便否道路ノ險夷相  
 距ルト果シテ如何ゾヤ苟モ篤志力學敢テ怠懈セズンバ  
 邊郷僻地ト雖氏其便ハ昔時都府ニ生レタル者ト殊ナル



無カラン然レバ則チ勞苦ハ東山其人ニ半バシテ功ハ必ズ之ニ倍セン

第十八 石多仲曆子一冊ヲ廁中ノ壁ニ糊塗セシ事  
石多仲ハ瀨濱ト號ス奥州瀨ノ上村ノ農家ニ生ル幼ニシテ學ヲ好ム長スルニ及ビ江戸ニ遊ビ同地方ノ人ナルヲ以テ餘熊耳ニ學ブ瀨濱熊耳ガ塾ニ寓バル十年日夜誦讀シテ怠ラズ其凡ニ對スル座下足著ク所為メニ寐ム又母年臘月ニ至レバ必ズ曆子一冊ヲ買ヒ之ヲ廁中ノ壁上ニ糊塗ス其記性モ亦人ニ過グ廁ニ之ヲ十二次ニシテ來歲十二月ノ支干ノ運動時令ヨリ晝夜ノ短長節氣旺相ニ至ルノ事ヲ暗記ス而シテ後チ其糊ヲ去ル以為ク曆子ヲ展卷マル廁ニ之クノ間ニ在ルトキハ別ニ寸晷ヲモ費サ

ズト年二十九ニシテ惟ヲ芝ノ三田ニ下ダス生徒稍集マル其名時ニ顯ハレ業將サニ大ニ行ハレントス歲三十八ニシテ疫ヲ病ムテ歿ス時寶曆八年ナリ  
櫻所子曰ク瀨濱東奥ノ一村落ニ生長シ其學ニ志シテ都門ニ留寓スル廁ニ上ボルノ間モ敢テ光陰ヲ空フセズ宜ナル哉其業將サニ大ニ行ハレントスルニ及ベルヲ惜ムラケハ天之二年ヲ假サズシテ大成ニ至ラズ然リトイヘドモ其勉學怠ラザリシハ以テ後進ノ標準ト為マ可キナリ

第十九 莊田靜志ヲ立テ忠誠ヲ以テ自ラ勗メシ事  
莊田靜琳菴ト號ス必フシテ谷一齋ニ從テ學ブ志ヲ立テ忠誠ヲ以テ自ラ勗ム僅カニ弱冠ニ踰エ其學既ニ通ジ尤



モ談論ニ長ズ、龜山侯（松平伊賀守忠晴）一たび其通鑑  
綱目ヲ講ズルヲ聞キ之ヲ喜ブ、祿百五十石ヲ以テ之ヲ聘  
ス、琳菴起テ之ニ應ジ、仕ヘテ侍讀トナル、歳二十八、琳菴天  
資溫柔、退然トシテ衣ニ勝ヘザル者ハ若シ、而シテ人ト得  
失ヲ論辨スルニ至テハ、吐欵詰責、利害ヲ避ケズ、塞諤ヲ以  
テ人皆之ヲ忌憚ス、遂ニ奸人ハ讒構スル所ト爲リ、圜圜ニ  
下ガル、嘗テ獄吏問答一卷ヲ著ス、經史ヲ諳記スル數千言、  
一字ヲ舛マラス、獄ニ在ルコト四年、延寶二年十月ヲ以テ  
棄市セラル、

琳菴才識淵茂シ、常ニ學者ノ志アリテ、行ヒ未ダ果斷ナラ  
ザル者ニ説テ曰ク、學ハ當サニ水ヲ習フガ如クスベシ、之  
ヲ淺處ニ習ヒ、而シテ後チ深キニ向フ、没溺シテ死セント  
欲スル者、數次方ニ始メテ功ヲ見ル、若シ其溺ル、ヲ懼レ  
テ、淺處ヲ離レ得テ了セザレバ、終身水ニ在リト雖、亦數  
尺ノ水ヲ游泳スル丁能ハズト、

櫻所子曰ク、神原篁洲ノ言ニ曰ク、天下ハ技藝ニ各四等  
アリ、一曰ク、下手、二曰ク、功者、三曰ク、上手、四曰ク、名  
人、上下三十年、縱橫一萬里、存スル所、此ニ出テズ、學者、道  
ニ於ケルモ亦然リト、琳菴ノ所謂終身水ニ在リト雖、ドモ  
亦數尺ノ水ヲ游泳スル丁能ハザルハ、下手ナル者ナリ、泳  
ヒテ能ク數里ノ波濤ヲ凌グ者ハ、上手ナル者ナリ、而シテ  
其下手タリ、上手タル所以ノ本ハ、他ナシ、没溺セントスル  
ヲ懼レテ、淺處ヲ離レ得ザルト、敢テ淺處ヲ離レテ深キニ  
向フトニ由ル、夫レ安佚ハ淺處ナリ、辛苦ハ深處ナリ、辛苦



ヲ歷嘗シテ凍餓セントスル者數次ニ至ルガ如クシテ其  
方ニ始メテ功ヲ見ルヲ得ルヤ必セリ然ルニ今世ノ學術  
技藝ニ志ス輩多クハ其衣ハ麗ヲ欲シ其食ハ鮮ヲ求人而  
シテ大ニ得ル所アラント欲ス我恐クハ終身學術技藝ニ  
從事スト雖厄所謂下手ナルヲ免ガレザラント夫何ゾ名  
人若クハ上手ノ地位ニ達スルヲ得ンヤ況ヤ躁進ヲ戒ム  
ルヲ知ラズ已レガ學ビ得タル所ヲ沽ラントスルニ急ナ  
ルヲヤ苟モ其學ビ得ニ於テ上手ト呼ビ名人ト稱セラレ  
ントヲ望マバ須ラク没溺シテ死セント欲スルニ至ル辛  
苦艱難ヲ辭ス可カラザルナリ

第二十 細井德民篤志力學ニ由テ德望ヲ得タル事

德民平洲ト號ス享保十三年尾張ノ南鄙平洲村ニ生ル家

世農ヲ以テ業トス平洲幼ニシテ讀書ヲ好ミ歲十七ニシ  
テ京都ニ遊學セント請ヒ單身ニシテ之ニ赴ク伊勢ノ人  
北畠世規ト云者ト舍ヲ同フシテ僑居ス垢衣弊帶糲ヲ食  
ヒ蔬ヲ啗ミ務メテ費用ヲ儉ニス是ヨリ先キ父正長之ガ  
爲ニ金五十兩ヲ與ヘ其用ニ適セシム京ニ在ルト一年十  
兩ヲ費消ス其餘ヲ以テ書數百卷ヲ購得シ歸期ニ及ビ兩  
馬ニ馱シテ還ル郷里皆以テ之ヲ美談ト爲ス平洲ノ京都  
ニ遊學スルヤ遍ク諸儒ニ詣ルニ學識品行ノ師資トス可  
キ者ヲ見ズシテ乃チ郷ニ歸ル父母其持操ト勉學トヲ喜  
ビ將サニ田宅ヲ分ツテ生理ヲ爲サシメントス平洲可カ  
ズシテ曰ク願クハ二百金ヲ得テ兒ガ欲スル所ニ從ハ  
ト乃チ之ヲ許ス盡ク書ヲ買テ之ヲ讀ミ足戶外ニ出デガ



此二一年自謂是。吾が師トスル所ナリト。延享  
中參河ノ元淡淵始メテ名護屋ニ來テ生徒ニ教授ス。平洲  
往テ之ニ謁シ。相與モニ經史ヲ商榷シ。大ニ其學識ト品行  
トニ服ス。以爲ク師事ハ人ヲ得タリト。淡淵稱シテ以テ。吾  
が業ヲ羽翼スル者ト爲ス。平洲廿四歳ニシテ。惟ヲ名護屋  
ニ下ダシテ教授ヲ業ト爲ス。幾クモ無ク。江戸ニ至リ。芝ニ  
寓ズ。淡淵歿スルニ及ビ。其門ハ諸子皆ナ。平洲ハ門ニ入ル。  
平洲ノ名始テ江湖ニ嘖々タリ。平洲江戸ニ教授スル二十  
年許リ。講業ノ盛ナル殆ント。虚日無シ。出テハ則チ列侯ノ  
ノ講筵入テハ。則チ在塾ノ子弟ヲ教育シ。惟レ日足ラズ。童  
ニ經學文章ノミナラス。世稱スルニ其人ノ經濟ニ長ズル  
ヲ以テス。王侯貴紳請テ以テ師ト爲ス。或ハ重祿ヲ以テ之

ヲ召カント欲スル者アレ。臣辭シテ仕ヘズ。私心竊カニ謂  
ラク。巴ムト無クンバ。則チ仕ヘン。尾ハ我カ墳墓ノ在ル所  
ナリ。仕フレバ。則チ豈他アラシヤト。年五十二ニシテ。尾侯ノ  
召ニ應ジテ。侍讀トナリ。督學ヲ兼ネシメ。田祿四百石ヲ賜  
フ。平洲尾藩ニ督學タリシヨリ。國ノ耆儒及ビ弟子若干人  
ヲ薦メテ。學職ニ充ツ。國中ノ民皆來テ教ヲ受ケザルナシ。  
學政大ニ振フ。之ヨリ先キ。平洲年四十四。米澤侯上杉治憲  
ノ聘ニ應ジテ。其國ニ往ク。侯聰明ニシテ。志ヲ政治ニ專ラ  
ニシ。平洲ヲ尊ム。テ賓師ト爲シ。禮待優渥ナリ。其言ヲ嘉納  
シ。舊弊ヲ洗滌ス。留リ居ル。一年ニシテ。歸ル。關境比隣。靡  
然トシテ。風ニ嚮フ。安永中。米澤ノ國學興讓館新築成ル。侯  
再ビ平洲ヲ其國ニ招キ。得失ヲ詢謀シ。政刑ヲ參定ス。又平



洲ト封内ニ巡行シ使役ノ煩劇ト民間ノ疾苦トヲ覆檢シ百廢悉ク舉ガリ豐施下ニ遍ネシ衆民大ニ悦ビ平洲ガ途ニ過グルヲ見感歎シテ淚ヲ垂レ拜跪合掌シテ大慈大悲ノ活如來様ト謂フニ至ル亦留ル一年ニシテ歸ル是ヨリ後ナ米澤封内治教ノ績海内ニ顯聞シ稱シテ當時ノ第一ト爲ス此ノ如クナルヲ以テ平洲晩年ニ至リ學識德望並ビ高ク世ノ所謂儒者ニハ非ルナリ凡ソ玉卿侯伯毎ニ平洲ト語ル必ズ人ヲ屏ケテ時ヲ移ス或ハ書牘ノ來ル讀ミ了レバ多クハ手ツカラ之ヲ焚ク蓋シ其封國米邑ノ政令綱紀機密及ビ政事典型必ズ豫メ知ルアリ然レドモ口ヲ箱シテ一モ言ハズ病革ナルニ及ビ書牘數十通猶ホ篋笥ニ在ル者ハ門人ニ遺言シテ悉ク之ヲ其主ニ返ス是ヲ

以テ家人ト雖凡其詳カナルヲ知ル能ハザリシト云ク櫻所予曰ク我邦門地ヲ以テ爵祿ヲ世襲スル外邦ノ天爵アル者布衣ヨリ起テ王侯ノ師トナルヲ得ルガ如キニ非リシナリ然ルニ平洲尾ノ南鄙ニ生レ畎畝ノ一匹夫ニシテ而シテ其篤志力學孜孜トシテ怠ラザル遂ニ公侯縉紳ノ賓師トナリ若クハ其顧問ニ備ハリ有土ノ大諸侯モ優渥ナル禮待ヲ以テスルニ至リ其言行ハレ其計用キテ澤衆民ニ及ブ何ゾ其レ盛ナルヤ況ヤ今日材能ヲ以テ爵祿ヲモ取ルベク事業ヲモ興ス可キノ昭代ナルニ於テチヤ後進ノ士平洲ガ地下ニ冷笑スル所トナル丁無カラシテ勉メヨ

第廿一 並川彌右衛門論語ヲ讀ムヲ聞キシ事



並川彌右衛門ハ享保時代ノ人ニシテ丹波並川村ニ生ル  
山城鳥羽ニ出デ、米商ヲ業トセリ其子五一郎幼キ時人  
ヲ雇フテ四書ノ素讀ヲ爲サシム一日論語ノ吾黨ニ躬ヲ  
直フスル者アリノ章ヲ讀ムヲ聞テ曰ク是レ太ガ恠ムハ  
キヲナリ予トシテ父ノ惡ヲ發バク何ゾ直シト謂フヲ得  
ンヤト次ニ孔子ノ吾黨ノ直キ者ハコレニ異ナリノ言ヲ  
聞キ理宜ク此ノ如クナルベシ孔子ハ尊ズベキ人ナリト  
云ヒシトゾ

櫻所子曰ク此事酷ダ石勒ガ漢高六國ノ後ヲ立ントセシ  
ヲ聞キ此法當固失トイヒ張子房ノ諫メシヲ聞キ幸有此  
事ト云フニ似タリ嗚呼未ダ學バズト雖凡之ヲ學ビタリ  
ト謂フベキモノ彌左衛門在リ諺ニ所謂論語ヲ讀ムテ論

語ヲ知ラザル徒一商估ニ愧ル無キヲ欲フト雖凡得ベカ  
ラズ

第廿二 應舉心ヲ專ラニシテ繪事ニ刻苦セシ事

天明中京都ニ應舉字ハ仲選ト云者アリ性畫ヲ好ム以爲  
ク肖貌寫生物ゴトニ其精ヲ極メント欲スレバ畢生力ヲ  
殫スト雖凡得ベカラズ其性ノ近キ所ニ因テ其妙ヲ窺フ  
ニ若カズト即チ雞及ビ狗子ヲ描ク應舉初メ雞ヲ描クヤ  
自ラ謂ラク飲啄鳴號ノ狀振翮修羽ノ態既ニ其肖似ヲ得  
タリ但風神氣骨天氣活潑ノ妙猶ホ未タ其精ヲ盡サスト  
乃チ日ニ祇園祠ニ至リ雞ノ群ヲ爲ス者ヲ視凝立シテ動  
カズ人以テ痴呆ト爲ス而シテ顧ミザルナリ此ノ如クス  
ル者年アリ一日恍然トシテ悟ルアリ自ラ顧ルニ滿腔皆



雞ナリ。因テ試ミニ掩障ニ就テ之ヲ寫ス。神采生動ス。真ト  
 辨スル無シ。之ヲ祇園祠ニ獻ズ。人皆其巧手ナルヲ驚歎シ  
 タリ。應舉猶ホ彼畫雞ヲ視テ。如何ナル批評ヲ爲ス者アラ  
 ント。門生ヲシテ日ニ祇園祠ニ至リ。其評スル者アルヤ否  
 ヤヲ窺ハシム。觀ル人唯其妙技ヲ感ズルノミ。一日賣蔬翁  
 アリ。掩障ヲ望ムデ佇立スル。少時獨語シテ曰ク。雞ノ傍  
 ニ草ヲ描カザリシハ最モ可ナリト。其去ルニ及ビ。門生尾  
 シテ往ク。東洞院ニ至リテ。一門道ニ入ル。門生歸テ此事ヲ  
 語ル。應舉翌酒肴ヲ携ヘ翁ノ家ヲ訪ヒ。懇口ニ教誨ヲ乞フ。  
 翁ガ曰ク。吾畫ヲ知ル者ニ非ズト雖モ。嘗テ雞ヲ畜養セシ  
 ニ。羽色ノ四時ニ變ズルヲ記憶セリ。足下ノ描キタルハ冬  
 ノ羽色ニシテ。殊ニ精妙ナリシカハ。其傍ニ草ヲ描カレザ  
 リシヲ歎賞シテ。覺ヘズ。獨語セシノミト。

應舉或時同猪ヲ寫サント欲シ。斯事ヲ八瀬ノ賣柴女ニ語  
 ル。女曰ク。我カ村落ニ於テハ。數猪ヲ見ルヲ得ト。一日女來  
 テ告ク。吾屋背ナル竹林ニ。一猪ノ來リ卧スアリト。應舉直  
 チニ之ト伴テ往キ見ルニ。大ナル猪ノ眠レルアリ。故ニ熟  
 視シテ之ヲ寫ス。後チ鞍馬ヨリ來テ炭ヲ賣ル翁アリ。此畫  
 ヲ眎ス。曰ク。是ハ病猪ニシテ卧猪ニ非ズ。何トナレバ猪ハ  
 眠ルト雖モ。其背上怒毛竦豎スル者ナリ。此畫ハ定メテ病  
 メル猪ノ卧シタルヲ視テ寫シタルナラント。應舉他日前  
 ノ八瀬ヨリ來ル婦ニ問フニ。彼猪ハ二三日ヲ經テ其處ニ  
 死セリト云フ。之ニ由テ應舉更ニ真ノ卧猪ヲ視テ之ヲ寫  
 シ。世ノ喝采ヲ得タリ。當時應舉ガ名聲翹然トシテ一時ニ



甲タルヤ、斷縑零楮、人爭ヒ購フニ重貨ヲ以テセリト云。  
 櫻所于曰ク、應舉ガ心ヲ專ラニシ、思ヲ致ス此ノ如クニシ  
 テ務メテ人ノ言ヲ聞キ、以テ益ヲ得ルヲ欲ス、宜ナル哉、技  
 其妙ヲ極メ、名モ亦隨テ著ハレタルヲ、夫レ世上百般ノ學  
 藝、技術未ダ嘗テ師友切磨ノ功ニ藉テ、其美ヲ成サズンバ  
 アラサルナリ、今夫レ大都通邑、人文ノ淵叢ニシテ、一技一  
 藝アル者、各々幟ヲ一方ニ樹テ、良師益友其人ニ乏シカラ  
 ズ、或ハ同僚タリ、或ハ朋友タリ、臂ヲ交ヘ膝ヲ接スルモ、就  
 テ其學ブ所ヲ正スヲ知ラズ、語偶其文章議論ノ疵瑕ニ及  
 ベバ、輒チ哂然トシテ怒リ面ニ顯ハレ、人ノ指摘スルヲ噴  
 ル、故二人ノ揄揚ヲ悦ビ、傲然トシテ自ラ夸テ曰ク、我學藝  
 天下ニ敵無シト、諸レヲ已ニ反求スレバ、果シテ益スルト

コロアルカ將タ損スル所アルナリ、嗚呼、俗日ニ澆漓ニシ  
 テ、學術技藝ノ進步顯著ナルモノ鮮シ、應舉ノ事以テ漓俗  
 ニ鍼砭ス可シ、豈ニ唯繪事ノミナラムヤ、世ノ文章議論ニ  
 長ジ、學術技藝ニ老タルヲ以テ、稱シテ名家鉅匠ト爲スモ  
 ノ、以テ誠ムルヲ知ル可シ、豈ニ唯後進者ヲシテ、驕心ヲ生  
 ゼシメザルノ資ト爲スベキノミナラシヤ。

第廿三 森祖仙三年山ニ在テ其技ヲ切磋セシ事

森祖仙ハ、大坂ニ在テ猿ヲ畫クニ名アリ、初メ長崎ニ在リ  
 シ時、獵者ニ托シテ一ノ猿ヲ得タリ、因テ之ヲ庭樹ニ繫ギ、  
 其傍ニ在テ猿ノ狀貌ヲ熟視シ之ヲ寫ス、鍛鍊スル、小年ア  
 リ、稍其真ニ逼ルヲ覺フ、遂ニ之ヲ絹素ニ淨寫シテ、清客某  
 ニ眎シ、其批評ヲ乞フ、客曰ク、惜クハ此レ人家畜養ノ形ナ



ニシテ天然ノ趣ニ非ズト。祖仙之ヨリ更ニ奮勵シ深山ノ中ニ棲遲シ木石ト居リ猿鶴ト群ヲ成ス。丁三年遂ニ其真ニ逼ル。妙ヲ得タリトイフ。

櫻所子曰ク夫レ畫ハ一小技ナリ然レ其業ニ從事スル者技ノ精妙ナルヲ欲スレバ力ヲ用ユル。此ノ如シ之ヲ以テ遂ニ其妙ニ至ル。況ヤ技ノ畫ヨリ大ナル者ニ於テコヤ。

第廿四 熊代彦之進虎圈ノ前ニ在テ虎ヲ畫キシ事彦之進名ハ斐繡江ト號ス世人通稱ヲ言ハズ熊斐ヲ以テ知ラル肥前長崎ノ人ナリ幕府ノ譯官タリ人トナリ膽氣アリ清人沈南蘋ニ從テ畫ヲ學ビ畫名一世ニ高シ或時台命ヲ奉シテ虎ヲ畫ク恰モ好シ番船虎ヲ載セ來リシニ際

ス斐紙ト筆硯トヲ携ヘ虎圈ニ近キ肖貌寫生其精ヲ極メントセシニ虎蹲踞シテ頭ヲ舉ゲズ斐其動作ハ態ヲ見ルニ由ナキヲ以テ傍ニ在ル竹頭ヲ執テ虎ヲ毆シ虎大ニ怒リ忽チ頭ヲ擡ゲテ斐ヲ嚇ス電目人ヲ射テ爛々ナリ傍人皆驚悸シテ奔リ避ク斐獨リ自若トシテ虎ハ狀貌ヲ熟視シテ之ヲ寫セリ始メ驚悸奔避セシ者其膽勇ニ服セリトイフ。

櫻所子曰ク獸虎ヨリ猛ナル無シ膳臣巴提使ガ虎ヲ斬ルガ如キハ勇武ヲ以テ名ヲ得タル人宜ク然ルベシ被加藤嘉明ガ虎ヲ牽テ前ヲ過グル者アリ傍人喧噪シテ走リ避ク嘉明ノミハ柱ニ倚テ坐睡シテ知ラザル者ノ如ク少時アツテ目ヲ開キテ何ゾ太ダ喧キ虎ヲ牽テ過グル者アリ



シヤト云ヒシガ如キ豊公ノ麾下ニ指ヲ屈スルノ猛將ナ  
レバ又宜ク此ノ如クナルベシ。斐ハ一介ノ譯官ニシテ畫  
ニ巧ミナル者ノミ然カモ能ク虎圈ノ前ニ在テ筆ヲ揮ヒ  
之ヲ毆打シテ震怒ノ態ヲ熟視シテ動カズ我ハ其膽勇ニ  
驚カズシテ其畫ニ篤志ナルヲ嘆ズルナリ。斐ガ畫ノ為メ  
ニ勉ムルノ至レル此ノ如シ其寫出セル所ノ虎亦必ズ狗  
ニ類セズ眼中自ラ百歩ノ威ヲ具ヘシナラム斐ガ丹青ヲ  
以テ名ヲ一世ニ擅ニセシモ亦宜ナリ。一技ニ長ズル者其  
カヲ用ユル虎威ヲモ避ケズ今ノ書ヲ讀ミ道ヲ知ラント  
スル者ニシテ猶ホ風雨寒暑ヲ懼ル豈一畫師ニ羞ルナキ  
ヲ得ンヤ。

第廿五 池無名發憤苦勵セシ事

池無名字ハ貸成九霞山樵ト號ス京都ノ人ナリ世ニ大雅  
堂ト稱スル是ナリ書ヲ善クシ畫ヲ巧ミニス書ハ晉唐ノ  
古帖ニ刻意シ結體飄逸自ラ一家ヲ成ス畫法ハ則チ梅道  
人倪雲林ノ間ニ出入シ專ラ氣韻ヲ以テ主ト爲ス山水尤  
モ清絶ナリ世人爭テ之ヲ購フ零縑斷楮ト雖氏寶重セザ  
ルハ無シ是ヨリ先キ狩野氏土佐氏世畫苑ノ冠冕ト爲ル  
其ノ衣鉢皆宋元諸名家ニ出ヅ而シテ授受寢其真ヲ失ヒ  
卒ニ變ジテ笨俗トナル有志ノ士其弊ヲ矯メテ之ヲ復セ  
ント欲シテカ以テ之ヲ振フニ足ラス獨リ貸成亦最モ高  
ク志最モ篤シ勤メテ必ズ法ヲ震旦ニ取ル而シテ時人未  
ダ之ヲ信ゼズ嘗テ畫扇ヲ齎ラシ尾濃諸州ニ遊ブ一握モ  
售レズ困ムデ歸リ瀬田ノ橋ニ抵リ悉ク之ヲ水中ニ投ジ



益發憤苦勵シテ遂ニ古人ノ堂奥ヲ窺フ名聲隆々然トシテ海内ニ震フ而シテ畫ヲ言フ者宋元諸家ヲ以テ準據ト爲サザル無キニ至ル貸成性山水ヲ好ム又濟勝ノ具ニ富ム千里孤往月ヲ經テ返ルヲ忘ル層巒複嶺飛屐上下ス其高峻ヲ極メザレバ止マズ最モ富士山ヲ愛シ屢之ニ登ル每ニ其路ヲ異ニス榛莽ヲ披キ狐兔ノ蹊ヲ攀ヂ人迹ノ未ダ至ラザル所ヲ究ム先後作ル所富士山ノ圖凡ソ一百嶺横側正偏其妙ヲ備極シ天下ノ絶筆ト爲ス櫻所子曰ク大雅堂嘗テ画扇ヲ齎ラシテ尾濃ニ遊ブヤ一握モ售レズ其能ク古人ノ堂奥ヲ窺フニ至テハ則チ零縑斷楮ト雖氏人爭テ之ヲ購フノミナラズ海内ノ畫風ヲ一變シ狩野氏土佐氏ノ二流ヲ壓倒スルニ至ル其天下ノ絶

筆ト稱セラル、ヲ以テ今ニ至ルマデ其畫幅ヲ傳フル者ハ十襲珍藏ス貸成何ヲ以テ其妙ヲ極ムルコト此ノ如クナルヲ致セシヤ曰ク其志ノ最モ篤クシテ發憤苦勵トシニ由ルノミ其人タル襟度蕭散塵垢以テ其懷ヲ涵セサルヲモツテ奇致全涌スト云フガ如キハ抑モ末ナリ

第廿六 皆川淇園讀書ニ勤勉セシ事

淇園又節齋ト號ス京都ノ人ナリ年四五歳ニシテ早ク文字ヲ識レリ其父試ミニ杜少陵ガ秋興八首ノ詩ヲ書シ與ヘシニ日アラズシテ記臆セリ是ヨリ讀書ヲ課トス督促ヲ煩サズ其父恆ネ二世儒記誦ノ學ヲ賤視シ嘗テ明經弘道ニ志シアリト雖氏年已ニ老タレバ其事業ヲ成就スルコト難シトテ淇園及ビ其弟成章ニ命ジテ其志ヲ繼ガシ



メ。經史百家ノ書ノ聞見ヲ資ケ。學識ヲ長ズベキ者ハ需ム  
ルニ隨テ之ヲ與ヘ。當時ノ宿儒博學ノ人々ニハ。普ネク交  
リヲ結ビテ來往セシメタリ。成章ハ人ノ辨論スル所ヲ聞  
テ。輒チ曉通シ。言ハ畢ルチ待タズ。淇園ハ蒙昧ニシテ通セ  
ザル者ハ如ク。詳悉ニ疑ヒチ質サレバ止マズ。人ヨクニ  
子ハ優劣ヲ辨ズルト無シ。然レトモ汎ク古今ノ載籍ニ涉  
リ見ルコト罕レナル者ニ至テハ。必ズ搜索ヲ窮メテ窺ハ  
ザル所無キハ。成章遠ク淇園ニ及バズトス。淇園或時其作  
ル所ハ。文チ一老儒ニ示シテ。正チ乞フ。輒チ數字ヲ改メタ  
ルハ。其字義ヲ問ヘバ改メタル文字。稍優ルチ覺ユト答  
ヘテ。其優ル所以ヲ説カズ。淇園竊カニ謂ク。文チ綴ルニ字  
義ヲ知ラズシテ。豈可ナランヤ。況ヤ經義ヲ解スルチヤト。

之ヨリ心ヲ字學ニ傾ケ。沈潛反覆シ。字典ハ訓詁也者多ク  
ハ假借ニシテ實ヲ得ルコト難シ。古人ガ字ヲ用ユルハ。例  
ヲ類集シテ。其理ヲ考覈シテ。通曉スルニ如カズト。象形ニ  
由リ。聲音ニ求メ。始メテ言外ノ妙所ヲ得之ヲ。六經ニ徴シ  
子史ニ照シ。旁引會通。以テ審カニ孝悌忠信仁義道德ヲ釋  
シテ。名疇六篇ヲ作ル。且ツ易詩書儀禮戴記春秋論孟學庸  
ノ譯解。凡ソ數百萬言。皆世ニ行ハル。其易ニ於テカチ用ユ  
ルコト最モ深シ。義ヲ思フテ得ザレバ。終夜寐ネズ。晨起机  
ニ對シテ。明チ俟チ。食スルニ方テモ。書ヲ傍ラニ置キ。且ツ  
食シ且ツ讀ミ。晷ノ移ルチ覺ヘズ。又門人ノ來テ。教ヘチ乞  
フアリ。若クハ客來テ。談話スルアルハ。机ニ對スルマ。ニ  
シテ。座ヲ移スコト無シ。門人退キ。客去レバ。書ヲ讀ムコト



復々初メノ如シ故ニ奴婢ノ其室内ヲ掃フアリ氏淇園  
座ニ及ブ能ハズ一日淇園ノ出タルヲ窺ヒ机邊ノ座ヲ  
掃ハント其座スル所ヲ見ルニ厚席拗竅シテ黯黒ナリシ  
猶且ツ其席ヲ徹シテ腐朽床ニ及ベリト其勤勉書ヲ讀ム  
尋常ナラザルヲ知ル可シ文化乙丑ノ歲西隣ノ地ヲ買  
ヒ學堂ヲ建テ弘道館ト名ク其門人ヲ遇スル威アツテ  
嚴ナラズ愛シテ狎レシメズ縉紳先生ヨリ學士大夫ニ至  
リ及ビ高賈農家ノ子弟ト雖氏應接待遇一モ殊ナルナ  
シ權貴ニ屈セズ寒素ヲ賤シメズ其門ニ入テ業ヲ問フ者  
先後三千餘人ニ及ブ淇園其詩賦文章ノ如キハ意到リ筆  
隨ヒ言ハント欲スル所手ヲ下セバ則チ粲然トノ章ヲ成  
スマタカヲ用ユル一無シ所謂讀書一萬卷筆ヲ下シテ神

アルモハナルベシ文化下卯ハ夏病ムズ食セズト雖氏且  
夕書ヲ講シ門人ヲ率ユル下平生ハ如シ其五月十六日ヲ  
以テ歿ス享年七十四ナリシト云フ  
櫻所子曰ク成章ハ才思活潑ニシテ人ノ論辯スル所ヲ聞  
テ言ノ畢ルヲ待タズシテ能ク曉通ス淇園ハ沈着ニシテ  
反覆疑義ヲ質サレバ止マズ而シテ二子ノ學識ヲ比較  
スルニ淇園ハ復カニ成章ノ右ニ在リ是其勤勉ノ力成章  
ノ能ク及ブ所ニ非ルヲ以テナリ才思人ニ過グルアリト  
雖氏勉力足ラザル氏ハ翻テ鈍才ニシテ勉強尋常ニ超ユ  
ル者ニ及バザル古來其例多シ少年才子深ク自ラ誠ゾズ  
ンバアル可カラザルナリ

第二十七 賴子成勉強刻苦シテ其志ヲ達セシ事



子成名ハ襄通稱ハ久太郎其父春水藝州竹原ノ人初メ大  
阪ニ寓シ徒ニ授ク飯岡氏ヲ娶リ安永九年子成ヲ江戸堀  
坊ニ生ム子成甫メ六歳忽チ其母ニ問テ曰ク天ハ何如ナ  
ル物ゾト母曰ク旋轉止マズ彼ガ如キハミト子成庭ニ下  
リ天ヲ仰ギ嘆ジテ曰ク不可思議ナル哉ト啼泣半時許リ  
八九歳ヨリ喜ムテ古來ノ軍記ヲ讀ミ寢食ヲ忘ルニ至  
ル既ニ句讀ヲ受クルニ及テ晝夜懈ラズ早ク雄邁俊偉ハ  
志氣ヲ抱ク寛政五年子成年十三ニシテ一詩ヲ賦シテ曰  
ク  
十有三春秋逝者已如水天地無始終人生有生死安得類  
古人千載列青史  
亦其志ノ存スル所ヲ見ルニ足レリ嘗テ眼ヲ患フ春水固

ク書ヲ讀ムヲ禁ズ陰カニ之ヲ讀ムテ止マズ年十四五家  
庭ニ學ビ小學近思錄皆已ニ誦習ス一日書ヲ曝ス東坡ノ  
史論ヲ讀ミ嘆ジテ曰ク天地間此ノ如ク喜ブベキハ文ヲ  
ハカト遂ニカヲ文章ニ肆ニス最モ史學ニ精シ即チ史ヲ  
著シ文ニ托シ以テ後世ニ垂ントス而シテ其書ヲ著スル  
ヤ身大都ニ居天下ノ英俊ト交リ書ヲ讀ム多カラザレバ  
則チ能ハズ之ヲ以テ早ク遠遊ヲ思フ父母尚ホ之ヲ膝下  
ニ羈セント欲スルヲ以テ果サズ年十八叔父杏坪ニ從ヒ  
東遊シ尾藤二洲ノ塾ニ在ル一年小學白ニ進ム即チ藩ヲ  
脱シテ京ニ赴ク是ヲ以テ罪ヲ越疆ニ得仕籍ヲ免ヌ文化  
七年菅茶山其塾生ヲ督センコトヲ請フ乃チ備後ニ遊ブ  
翌年去テ京都ニ遊ビ遂ニ止ル年三十二子成常ニ昇平日



久ク止氣ノ振ハザルヲ慨ス故ニ氣節ヲ以テ自ラ持シ亦  
以テ人ヲ導ク未ダ嘗テ已レヲ屈シ人ニ隨テ浮沈容ヲ求  
メズ其故國ヲ去ル誓テ曰ク已ニ父母ノ國ニ仕フル能ハ  
ズ復々官服ヲ着ケテ貴人ヲ見ズト而シテ京ニ入ルノ後  
藝州侯ノ往來伏見ヲ過グルヲ聞ク必ズ袴ヲ着ケ南ニ  
嚮テ望ミ拜ス諸藩之ヲ聘スレハ皆固辭シテ應ゼズ日野  
大納言資愛文辭ヲ好ミ都下ノ諸儒ヲ招ギ文字飲ヲ爲ス  
其名ヲ聞キ之ヲ請スレハ往カズ其請數回ニ至ル乃チ陳  
ス野人禮節ニ習ハズ若シ野服出入シ及ビ賜予ノ際臣禮  
ニ類スル者ナクンバ則チ敢テ命ヲ奉ゼント大納言之ヲ  
許ス乃チ往ク翌日金ヲ餽リ以テ謝ヲ爲ス子成之ヲ見テ  
曰ク豈禮幣ニシテ人ノ名ヲ小書低書シ自ラ已ガ名ヲ大

署スル者アラニヤト門生ヲシテ之ヲ返却セシム大納言  
從テ之ヲ謝シ益其屈セザルヲ敬ス雨後自ラ其廬ヲ訪フ  
ニ至ル一日子成ヲ召シ宴ヲ賜ス醉後戲レニ畫ヲ作クル  
一大藩侯見テ之ヲ喜ビ人ニ介シ朝鮮布ニ幅ヲ寄セテ畫  
ヲ請フ子成憮然トシテ曰ク我ヲ以テ畫工ト爲スカト乃  
チ二絶句ヲ作り其布ニ大書シテ之ヲ返ス其一ニ曰ク

曾謝橫經弄翰儒寧能餘技備觀娛胸中畫本猶堪獻彷彿  
幽風七月圖

家藏書無シ四子五經東坡集唐宋八大家文數品本朝ノ史  
ハ唯烈祖成績藩翰譜ノミ而シテ古今ノ史籍制度兵法及  
ビ家譜野乘涉獵セザルハ無シ終ニ能ク外史政記ノ大著  
作ヲ成ス一生アリ外史ヲ請フ子成之ヲ頷ス後チ又來リ



促シテ曰ク、一權貴ニ獻ゼント欲スト。子成色ヲ正フシテ曰ク、我が史ハ權門媚ヲ納ルハ、一具ニアラズト。竟ニ與ヘズ。

子成名既ニ一時ニ重シ。京ニ遊ブ者、多ク來テ見ユルヲ求ム。一切謝絶シ。已ムヲ得サルニ非レハ、則チ見ズ。平生讀書ニ耽リ、著述ヲ勤ム。常ニ門生ニ謂テ曰ク、我ヲ才子ト謂フハ、未ダ我ヲ悉クサ。ル者ナリ。我ヲ能ク刻苦スト謂フ者ハ、真ニ我ヲ知レリト。夕ニハ、則チ燈ヲ挑ゲテ書ヲ讀ミ、五更ニ至テ後チ寢ニ就ク。朝夕ニハ、則チ起キ、自ら衾褥ヲ収メ、戸牖ヲ掃ヒ、以テ常ト爲ス。寒暑ト無ク一ナリ。其人ニ接スル、吟域ヲ設ケズ。直チニ肝膈ヲ吐ク。人苟モ其意ニ違ヘバ、對面詰責シテ少クモ假借セズ。改ムレバ、則チ止ム。未

ダ嘗テ毫モ意ニ介セズ。門生ニ教ユル甚ダ意ヲ用ユ。書ヲ講スルニ、抗聲飾辨セズ。恂々トシテ談話ノ如クシ。倦メバ、則チ煙ヲ吹キ茶ヲ喫シ。必ズ蘊輿ヲ摘發シ。妙旨ヲ剖析シ。人々ヲシテ了然タラシメテ後チ止ム。天保元年、胸痛ヲ患フ。久シクシテ愈ユ。同三年六月、忽チ咳嗽ヲ發シ、血ヲ咯ス。醫曰ク、是レ積年精神ヲ勞スルノ致ス所。所謂肺血疾ニシテ治スベカラザルナリ。先生ハ豪傑ニシテ死ヲ怖レズ。敢テ實ヲ以テ告グト。子成笑テ曰ク、死生命アリ。然レ凡我レ老母アリ。且ツ志業未ダ成ラズ。假令一ノ生理無キモ、宜ク醫療ヲ加フベシ。慎ムテ藥ヲ服シ。傍ラ死計ヲ爲サンノミト。時方ニ日本政記ヲ著ス。乃チ日夜勉強シテ稿ヲ構ス。曰ク、我レ必ズ之ヲ成シテ地ニ入ラントスト。秋ニ及ビ、疾益劇



シ然レ氏客至レバ談笑自若タリ。偶猪飼敬所來リ訪ヒ談  
南北朝ノ正統ノ事ニ及ブ。議大ニ合ハズ。子成曰ク。苟モ北  
朝ヲ以テ正統ト爲ス。豈ニ新田楠諸公ヲ以テ亂臣賊子ト  
爲ンヤト。目張リ眉軒ガル。其慷慨激烈。病ムト雖。氏衰ヘズ。  
遂ニ更ニ正統論ヲ著シ。之ヲ政記中初論ノ後チニ置ク。子  
成ノ議論用ニ適スルヲ以テ主ト爲ス。書名亦諫シト雖。  
氏緒餘ノミ。其常ニ心ヲ用ユルハ經濟ノ學ナリ。故ニ弱冠  
ヨリ以來。蘇軾カ策論ニ擬シ。新策十餘篇ヲ作り。晚年ニ及  
ビ頗ル之ヲ刪潤ス。即チ通議ナリ。死ニ先ダツ三日。忽チ曰  
ク。猶ホ言ハサル可カラザル者ハ在ルアリト。即日之ヲ草  
ス。内廷篇是ナリ。外史ハ凡ソ二十年ヲ經テ成ル。而シテ後  
チ猶ホ之ヲ家ニ秘ス。白河樂翁少將之ヲ聞キ。禮ヲ昇フシ。

以テ之ヲ請フ。是ヨリ遂ニ世ニ行ハル。政記最モ晚年ノ作  
ニシテ記事多ク。病中ニ成ル。而シテ終ニ全ク稿ヲ脱スル  
能ハザリシナリ。子成病既ニ革カナリ。曰ク。我が死方ニ逼  
レリト。然レドモ猶ホ眼鏡ヲ著ケテ。政記ヲ手ニシ。刪潤シ  
テ止マズ。忽チ左右ヲ顧ミテ曰ク。且ク喧キナカレ。我將チ  
ニ假寐セントスト。乃チ筆ヲ閣シ。眼鏡ヲ脱セス。シテ瞑ス。  
就テコレヲ撫スレバ。則チ逝ク。年五十三。天保三年九月ナ  
リ。  
櫻所子曰ク。子成ノ著スル所。外史政記ノ如キ。全國ニ傳播  
シ。初學ノ國史ヲ讀マントスル者。闕クベカラザルノ書  
トスルニ至ル。而シテ徳川氏ノ季世勤王ノ士輩出スト。雖  
氏國內一般ニ貴賤ト無ク。王室ヲ尊ビ。幕府ヲ賤ムヲ知ル



二至リシ者子成カ史ヲ修メ其言辭ノ慷慨激切ナル大ニ  
人心ヲ感動セシ者與ツテカアリト謂フモ大過ナカラシ  
彼大日本史ノ如キハ卷帙浩繁其載スル所亦詳明ナリト  
雖氏水戸藩侯ノ學士ヲ招集シテ編纂スル所即チ官撰  
書ナリ外史政記ノ如キ子成布衣ノ士ニシテ善ク之ヲ成  
ス殊ニ其家藏書ニ乏シク僅カニ烈祖成績藩翰譜ノ二書  
ニシ他ハ數部ノ漢籍ニ過ギズト云テ以テスレバ其引用  
ノ書ヲ借覽シ或ハ抄録スル等苦辛思フベシ而シテ其政  
記ノ如キハ病大ニ漸ムニ及ンテ猶ホ手ヲ釋カズ此ヲ刪  
潤シ眼鏡ヲ著ケテ瞑スルニ及ベルモノ實ニ勉メタリト  
謂ツベシ子成年猶ホ幼フシテ既ニ古人ニ類シテ千載ノ  
後子ニ至ルマデ名ヲ竹帛ニ垂ルニ志アリ稍長スルニ

及ビ時ノ不可ナルヲ知り敢テ仕ヲ求メズ權貴ニ阿ネラ  
ズ史ヲ著シ以テ後世ニ垂ントスルヤ屬續ノ間猶ホ子ヲ  
釋カスト云フニ至ル宜ナル哉其成業ノ卓然トシテ能ク  
其言ヲ踐ミ其志ヲ達シ今ニ於テ垂髫兒ト雖氏山陽賴襄  
アルヲ知ラザル者無キヲ致セルヲ其此ノ如ク志ヲ遂ケ  
得タル所以ハ何ノヤ其自ラ我ヲ才子ト謂フハ未タ我ヲ  
悉クサハル者ナリ我ヲ能ク刻苦スト謂フハ真ニ我ヲ知  
ル者ナリト謂フヲ以テ見レバ蓋シ子成モ亦刻苦勉強ヲ  
以テ之ヲ成就セシモノニ外ナラザルベシ若シ之ヲ天稟  
ノ史才筆カアリテ然ル者ト爲ストキハ子成豈ニ首肯セ  
ンヤ今ヤ日新進步ノ隆運ニ際シ興スベキノ事業學ブベ  
キノ藝術數フルニ勝ユベカラズ誰カ能ク雄邁俊偉ノ志



氣ヲ抱キ、古人ニ類シテ千載青史ニ列スルヲ期スル者  
ゾヤ。誰カ能ク刻苦勉勵、日夜怠ラザル、子成其人ニ減セザ  
ランコトヲ誓フ者ゾヤ。

第二十八 古川某地理ヲ究メンガ爲メニ海内ヲ歴

遊セシ事

古川某ハ備中ノ人ナリ。幼ニシテ大志アリ。地理學ヲ喜ブ。  
學業ハ心所無シ。少小ヨリ海内ニ浪遊シ。奥羽ニ抵リ、鯨浦  
ヲ渡リ、蝦夷ヲ窺ヒ、筑紫薩隅ヲ究メ、鬼界島ニ至ル。其間鳥  
道ヲ攀キ、洪波大濤ヲ涉リ、饑寒困頓、舟殆ト覆ヘリ。溺没セ  
ハトスト、雖氏自若ナリ。山谷ノ形態隆然タリ、窪然タリ、及  
ビ眺覽スル所、樹叢ノ如ク、波瀾織ルル、如キノ、狀ヲ寫ス。畫  
ニエニナル者ノ如シ。尤喜ムテ、近古戰爭ノ跡ヲ尋ネ、其攻

守勝敗ノ由ル所ヲ觀、鈎股法ヲ以テ遠近高低ヲ揣カリ、圖  
說ヲ著ハシ、鑿々トシテ據アリ。嘗テ世ノ兵ヲ以テ家ニ名  
アル者ヲ罵テ曰ク、此輩ハ芋ヲ煮テ熟否ヲ辨ゼザル者ナ  
リ。焉ンゾ實用ニ施スベケンヤト。寛政中、閣老越中守白川  
侯路ニ當ル。意ヲ海防ニ注ギ、關東諸港津ヲ巡視ス。某ハ名  
ヲ聞キ、遠ク召致シ、詢フ所アラント欲ス。即チ往キ、謁シ、問  
ニ隨テ、指畫ス。應對流ル、ガ如シ。侯大ニ之ヲ奇トス。尋テ  
命ヲ受ケ、武藏五郡ハ圖譜ヲ釐正ス。旨ニ稱フ。遂ニ翁ヲ祿  
セント欲ス。人ニ意ヲ以テ某ヲ喻サシム。某哂テ曰ク、吾老  
タリ、折腰ノ事ヲ習ハズト。直チニ歸テ室ヲ某郷岡田村ニ  
築キ、門ヲ杜ヂテ書ヲ著シ、咏歌自ラ娛ム。嘗テ人ニ謂テ曰  
ク、大丈夫無事ハ時ニ生レ、己ニ彼ハ富兵白山ヲ盆玩シ、大



湖茅渚ヲ沿視スル者ト相周旋スル能ハズ今世ハ所謂薦  
紳先生ハ偏裨ノ用ニ供スルニ足ラズ某々ハ差可ナルノ  
ミト

櫻所子曰ク頼山陽某ノ事ヲ記シテ曰ク其海内輿地及ビ  
四隣畧圖ヲ觀ルニ世ハ地圖ト大ニ異ナリ州郡ノ界ヲ畫  
セズ特ニ山川脈理ヲ示シ畧州名ヲ傍ニ署スルハ余此  
ニ因テ海宇ノ大勢ヲ識ルヲ得已ニシテ四方ニ遊ビ以テ  
之ヲ驗スルアリ史ヲ作り且ツ事ヲ論ズルニ及ビ依據ス  
ル所多シ皆ナ翁ノ賜ナリト亦以テ某ノ羨クル所無クシ  
テ而シテ大ニ得ル所アルヲ見ル可シ思フニ某ハ太平無  
事ノ日ニ生レ奮然トシテ地理ノ學ヲ實際ニ就テ研究セ  
ント欲シ跋渉ノ勞ヲ辭セズ脚跡蜻蜒全州ニ遍ネシ當時

舟楫ノ便ナラザル道路ノ險惡ナル其困苦想フ可キナリ  
今世ノ人士學藝技術ニ刻苦奮勵スル山中某ノ如クナラ  
ンニハ何事カ成ラザラン而シテ其功烈亦昔時ノ如ク湮  
沒セズシテ永ク美名ヲ日本文明史ニ輝カスアラント必  
セリ今日ニシテ學術技藝ニ奮勵スル所無クンバ將タ何  
ノ日ヲ待タンヤ

第二十九 森字左衛門書ヲ手寫シ數十筐ニ至リシ  
事

森字左衛門字ハ白高江戸ノ人也世舉母ノ城主内藤侯ニ  
事ヘテ宰臣ト爲ル白高人ト爲リ慷慨ニシテ勉強ハ人  
ニ過絶ス學ヲ好ミ凡ソ治邦安民ヨリ兵法火術籌海書ニ  
至ルマデ佳著ヲ得レバ輒チ之ヲ手寫ス膏ヲ焚キ晷ニ繼



日本書紀卷之三  
ギ。攷。カ。ト。シ。テ。倦。マ。ズ。謄。録。ス。ル。所。數。十。筐。ニ。及。ブ。積。ム。デ。座。右。ニ。置。キ。及。覆。披。展。シ。朱。黃。爛。然。タ。リ。必。ズ。其。要。領。ヲ。得。テ。止。ム。白。高。官。事。鞅。掌。ト。雖。氏。而。カ。モ。閑。ヲ。偷。シ。達。人。名。士。ト。交。リ。鹽。谷。宕。陰。川。西。士。龍。安。井。仲。平。芳。野。叔。果。等。ト。詩。酒。徵。逐。ス。時。二。天。下。晏。然。ト。シ。テ。四。境。無。事。ナ。リ。然。レ。氏。白。高。清。國。ニ。鴉。片。ノ。亂。ア。ル。ヲ。聞。キ。竊。カ。ニ。杞。憂。ヲ。抱。キ。友。ト。相。遇。フ。輒。子。兵。備。ヲ。論。究。ス。最。モ。心。ヲ。海。防。ニ。留。ム。日。夜。劈。畫。ス。ル。所。ア。リ。以。テ。事。ニ。施。ス。ヲ。思。フ。中。風。ニ。罹。リ。文。久。三。年。歲。五。十。九。ニ。シ。テ。歿。ス。  
櫻所子曰ク。白高一藩ノ宰臣トシテ。官事鞅掌ノ間能ク一時ノ名士ト交ルスヲ。尋常俗吏ト同視ス可カラズ。其清ニ鴉片ノ亂アルヲ聞キ。海防ノ事ヲ畫ス。亦憂國ノ士ト謂フ

可シ。況ヤ書數十筐ヲ手寫シ。座右ニ積ム。及覆披展スルニ至ル。篤志ト謂フ可キナリ。

第三十 觀世次郎太夫儋父ヲ師トセシ事

猿樂ニ觀世部ナル者アリ。足利氏ノ時ニ著ハレ。累世業ヲ襲ヒ。徳川氏ノ時ニ至ル。次郎太夫ト云者ニ至テ。尤モ著ハル。ト云フ。猿樂ニ曲名木賊ト稱スル者アリ。最モエミナリ難シ。世奏スルニエナル者ナクシテ。次郎太夫獨リ此曲ヲ以テ著ハル。毎ニ之ヲ奏ス。諸伶部號シテ善伎者ト稱シ。皆嘆稱シテ措カス。次郎太夫モ亦自ラ謂ラク。天下ハ此曲ニ妙ナル者。我ニ若クナシト。或時觀世部大ニ場ヲ櫻田ニ開キ。以テ伎ヲ演ス。奏木賊ノ曲ニ及ブ。都下傳聞シテ。侯伯士大夫ヨリ。賈豎販婦ニ至ルマデ。聚觀セザルハナシ。既ニ



シテ次郎太夫錦袍繡袴、鎌ヲ手ニシテ出ヅ、折旋舞踏、悉ク其節ニ中タル、衆喝采シテ、巴マズ、呼聲沸クガ如シ、曲闌ル、次郎太夫顧テ、其徒ニ謂テ、曰ク、觀ル者皆服ス、而シテ獨リ、隅ニ笑フ者アリ、汝チ物色シ來レト、乃チ諸レヲ門ニ要シ、テ得タリ、其人叩頭シ、罪ヲ謝ス、次郎太夫曰ク、何ゾ罪ヲ謝スルヲ須キヤト、因テ其業ヲ問ヘバ、則チ云フ、陸奥ノ人ニ、木賊ヲ刈テ生ト爲ス、其笑フ所以、問ヘバ、則チ云フ、木賊叢生スル、運鎌尤モ難シ、一前一却、便チ能ク之ヲ剪ル、今君ガ爲ス所ヲ觀ル、則チ却剪スルハ、吾故ニ其法ヲ失スルヲ笑ヒシナリト、次郎太夫大ニ感悟シ、即チ其僮父ヲ拜シテ、師ト爲シ、講習日夜ヲ累ネ、盡ク其法ヲ得タリ、是ニ於テ再ビ木賊ノ曲ヲ奏ス、其巧妙更ニ前ニ倍增ス、而シテ木

賊次郎太夫ノ綽號、天下ニ著ハル、次郎太夫終ニ千金ヲ以テ、僮父ニ報ズト云フ、

櫻所子曰ク、聞ク楊廷秀ハ博學宏文ナルモ、嘗テ下吏ノ言ニ從ヒ、文中ノ一字ヲ改ム、吏ヲ稱シテ一字ノ師ト爲スト、傳ヘテ以テ美譚ト爲ス、然リト雖、廷秀ハ有識ノ士ナレバ、汎ク益ヲ求メテ貴賤ヲ論ゼザリシモ、亦深ク恠ムニ足ラズ、次郎太夫ノ如キ、一伶人ノミ、其意ヲ伎ニ用ユルノ篤キ、實ニ諸伶人ノ若カザルノミナラズ、儼然タル士君子ト雖、次郎太夫ニ愧ル無キ者、蓋シ鮮シ、何トナレバ、世上却剪スルノミナル者アリテ、其隅ニ笑フ者一人ノミナラザルモ、延テ之ヲ問ヒ、問フテ之ヲ師トスル能ハザルノミナラズ、憤然其笑フ者ヲ罵テ曰ク、彼ハ僮父ナリ、彼ハ暴書生



ナリト、翻テ己ヲ妬ミ已レヲ毀ル者ナリトシテ之ヲ貶斥  
ス。故ニ已レガ失錯誤謬アリト雖、氏多クハ之ヲ悟ラズ、偶  
之ヲ知ルモ改メズ、隨テ之ガ辭ヲ作クル、吁、士君子ニシテ、  
一伶人ノ平素黽勉、意ヲ伎ニ用ユルノ篤キニダモ若カズ  
シテ可ナランヤ、學者須ク反省スル所アルベキナリ、

第三十一 寶生彌五郎指ヲ咋ムデ假面ニ血ヌリシ  
事

寶生彌五郎ハ散樂ヲ以テ幕府ニ仕ス。蚤ク善伎ヲ以テ名  
アリ、而シテ道成寺ノ曲殊ニ其得意ト爲ス。時ニ某侯酷ダ  
散樂ヲ好ミ、嘗テ彌五郎ヲ召シテ其曲ヲ演セシム。彌五郎  
乃チ女装ヲ扮シ、舞曲ヲ奏シ、烏帽繡衣階ヲ踐ムデ場ニ上  
ル。既ニシテ謠フ、謠ヒ畢テ鼓笛響キ急ナリ、舞踏上下、直チ

ニ前ムテ鐘ニ近ツキ躍テ懸鐘ニ入ル。鐘人ト與モニ墜ツ。  
凡ソ此曲ヲ演スル者例シテ豫メ鬼女ノ假面ヲ鐘中ニ置  
キ、以テ後曲ハ換装ニ備フ。此日彌五郎之ヲ索ムレ、氏獲ズ。  
蓋シ諸伶輩其技能ヲ妬ミ、潛カニ瘦シ以テ之ヲ害ムルハ  
彌五郎之ヲ覺トリ、切齒憤懣ス。既ニノ謂ラク事、已ニ此  
ニ至ル。其狼狽奔走シテ笑ヒヲ衆人ニ取ランヨリハ非常  
ノ装ヲ作シ、以テ人目ヲ驚カスニ孰若レト。乃チ其指ヲ咋  
ミ之ヲ前曲用ユル所ノ假面ニ塗ル。鮮血淋漓トシテ、鬼氣  
真ニ逼ル。取テ之ヲ蒙ムリ裝成テ鐘ノル。彌五郎乃チ起舞  
曲ヲ奏ス。怒氣勃々、毛髮悉ク張ル。加フルニ假面ノ奇異ナ  
ルヲ以テス。觀ル者驚歎シ、以テ絶技ト爲ス。曲闋テ侯其所  
由ヲ問ヒ、始メテ其儕輩ノ窘ムル所トナルヲ知り、激賞シ



テ舍カズ厚賚之ヲ勞ラヒ後ハ侯其假面ヲ請ヒ之ヲ府庫ニ藏シ各々テ塗血假面トスト云フ。櫻所子曰ク小人ノ能ヲ妬ムハ社會ノ通患ナリ。彌五郎ノ意ヲ伎ニ用ユルノ深キ指ヲ咋ムデ假面ニ血ヌリ群小ヲシテ寒心セシム今世ノ人士動モスレバ危キニ臨ムテ逡巡シ一毫已レニ害無カラシテ欲スルヨリシテ敢爲ノ氣象ニ乏シキ者亦焉ンゾ天下ノ人ヲシテ驚歎セシムルニ足ランヤ嗚呼彌五郎ガ其伎ノ爲メニスルノ奮勵ナルニ愧ル丁多シ。

第三十二

山田琳卿學業ヲ勤メ實踐ニ厚カリシ事

山田琳卿安五郎ト稱シ方谷ト號ス備中ノ人文化二年ニ生ル家世農ヲ業トス琳卿三四歳ニシテ能ク摩算字ヲ作

リ句讀ヲ解ス八九歳ニシテ能ク詩文ヲ屬ス客アリ問テ曰ク兒ガ學問ハ何事ヲ力爲サントスルゾト琳卿數ニ應ジテ曰ク國ヲ治メ天下ヲ平カニスト客驚歎ス成童ニシテ恬恃ヲ失ヒ家務ヲ治ム暇マアレバ則チ誦讀シテ懈ラズ松山藩主板倉侯之ヲ聞キ二口糧ヲ給シテ學資ニ充テ尋デハ口糧ヲ賜ヒ班中扈從ニ准ジ藩學ノ會頭ト爲ス時二年二十五居ル二年京都ニ遊ブテ請ヒ寺島鈴木春日ノ諸儒ニ交リ遂ニ江戸ニ至リ佐藤一齋ニ從ヒ佐久間象山鹽谷宥陰等ト友タリ相共ニ研精スルト凡ソ八年其勤苦勉勵セルヲ以テ歸ル日ニ到リ業大ニ進ム祿六十石ヲ賜ハリ學頭ト爲ス琳卿循々トシテ教授シ關藩ノ子弟競テ學ニ嚮フ而シテ遠近ハ生徒モ亦麇集シ家塾恆ホニ



日本志 卷之三  
盈ッ、又權デラレテ度支ヲ掌ドリ、財政ヲ革ム時ニ藩ノ紙幣濫出シ、價格大ニ減ズ、琳卿其半ヲ火ス、乃チ原價ニ復セリ、又大ニ物産ヲ殖シ、轉ジテ江戸ニ鬻ギ、以テ邸費ニ充ツ、是ニ於テ貯金歳入ニ倍シ、兵械ノ殘缺スル者、盡ク備具シ、士祿ノ節減スル者、皆舊ニ復ス、侯又琳卿ヲシテ郡宰ヲ兼、不民政ヲ革メシム、琳卿乃チ賄賂ヲ絶チ、奢靡ヲ禁ジ、郷校ヲ設ケ、貯倉ヲ置キ、道路隘キ者ハ之ヲ拓キ、川溝塞ガル者ハ之ヲ疏シ、巡吏ヲ嚴ニシ、郷兵ヲ編ミ、以テ不虞ヲ戒ム、之ヲ行フ、十年、民富ミ、俗變ズ、是ヨリ先キ、藩侯其家臣ノ弊風ヲ革メ、カヲ文武ニ專ラニシ、及ビ洋陣ヲ演セシメ、軍艦ヲ購フ、皆琳卿ノ贊成スル所、衆論喧騰、風刺一身ニ萃マル、琳卿シラザルモハ、如シ、而シテ侯益之ニ任ジテ、疑ハズ、

禄百石ヲ加賜シ、參政ニ任ズ、衆モ亦終ニ服ス、當時昇平日久シク、列藩奢侈遊惰ニシテ文武ノ何事タルヲ知ラス、是ヲ以テ松山藩革政ノ名、殊ニ藉々タリ、四方ヨリ來テ風ヲ觀ル者、跡ヲ絶ズシテ、琳卿ニ就テ理財ヲ問フ者、最モ多シ、文久元年、幕府侯ヲ以テ寺社奉行ト爲ス、琳卿扈從シ、江戸ニ如ク、會略血ヲ患ヒ歸養ス、何クモ亡ク候、閣老ト爲ル、琳卿ヲ召ス、琳卿疾ヲカノテ東行シ、顧問ニ備ハル、大將軍特ニ謁ヲ賜フ、侯遂ニ琳卿ヲ以テ老臣ニ准ズ、是時外國覬覦シ、大藩跋扈シテ、幕政憤々タリ、積弊百出ス、琳卿侯ヲ輔ケ、大ニ釐革スル所アラント欲ス、謁ヲ春岳明山諸侯ニ執リ、横井桂ノ諸士ニ接シ、百方周旋ス、然レモ否運ノ復々回ス、可カラザルヲ見、遂ニ疾ニ移シテ致仕ス、侯其留ム可カラ



ナルヲ知リ刀ヲ賜ヒ慰勞シテ之ヲ許シ猶小藩政ノ議ニ  
與カルヲ命ズ維新ノ後琳卿年老ユ世事ヲ厭フテ刑部山  
中ニ退隱ス而シテ四方ヨリ來テ業ヲ問フ者率不數百人  
明治十年六月年七十三ニシテ歿ス

琳卿ノ人タル豪爽ニシテ智略アリ議論多ク人ノ意表ニ  
出ヅ而シテ恭遜以テ之ヲ行ヒ忠誠以テ之ヲ貫マク故ニ  
人皆信服ス少壯ニシテ酒ヲ嗜ミ快飲劇談往々嗜ニ徹シ  
テ止ム遂ニ此ヲ以テ疾ヲ致ス一意攝養杯ヲ手ニセザル  
者二十年其性ニ克チ欲ヲ窒ギ實踐ニ篤キ大抵此ニ類ス  
其博聞浹洽ナル書ニ於テ讀マザル所無シ讀ム必ズ精到  
深詣獨得ノ說多ク又禪理ニ邃カシ其平生襟ニ投ジテ勇  
進シ理ヲ見テ決行シ物ニ執滯セザル者蓋シ此ニ得ルア

リト其詩文達意ヲ主トシ筆ヲ下セバ千言立ドノ口ニ成  
ル隨テ散逸シ復々稿ヲ留メズ獨リ獻筆對問ノ國字稿ア  
リ積ムデ將サニ身ニ等シカラントスルモ秘シテ人ニ示  
サズ嘗テ門人ニ謂テ曰ク吾藩事ヲ論ズル者多ク行ハル  
天下ノ事ヲ論ズルニ至テハ則チ一モ行ハレズ他日此稿  
ヲ觀テ之ヲ知ラント

櫻所子曰ク琳卿農家ニ長生シ早ク松山侯ノ知ル所トナ  
リ中扈從ヨリ宰臣ト班ヲ同フスルニ至ル幕府政ヲ失シ  
人心恟々タルノ日ナリト雖門閥世襲ノ曩時ニ在テハ  
異常ノ拔擢ヲ受ケタル者ト謂フ可シ而シテ其學ヲ所ヲ  
以テ松山一藩ノ財政ヲ革メ民政ヲ革ム後チ侯ヲ輔ケテ  
國ヲ治メ天下ヲ平カニスルノ初志ヲ達セント試ミタル



毛時ノ非ナルヲ知テ退隱セリ。其能ク此ノ如クナルヲ致  
セシ所以ノ者。琳卿ガ性ニ克チ欲ヲ窒ギ、實踐ニ篤キ。其嗜  
ム所ノ酒ヲ禁停シテ。二十年ニ及ベルヲ以テ。學業ニ政務  
ニ堅忍勉強ニシテ。未ダ嘗テ其嗜好ヲ充タシ。言ニ敏ニシ  
テ行ヒニ鈍キガ如キ。無カリシヲ推知スベシ。後進ノ士。  
恆ニ琳卿ガ實學實踐ヲ模範トシ。性ニ克チ欲ヲ窒ギ。敢テ  
懈ル。無クシバ。其身ノ利達ナラザラン。ヲ欲スト雖ヒ。  
豈得ベケンヤ。若シ性ニ克チ欲ヲ窒グ。能ハズ。辨論ニ巧  
ミナルモ實踐ニ迂ナラバ。則チ以テ利達ヲ求メント欲ス  
ルヒ。猶ホ煙無キノ火。水無キノ氷ヲ求ムルガ如シ。省察セ  
ズンバアルベカラザルナリ。  
日本立志編卷之三終

樂善師表吉

明治十二年十一月十五日版權免許  
同 二十年九月十九日七版御届

著述者

福島縣平民

千河岸貫一

東京府下本所區外手田  
三拾九番地寄留

出版人

大阪府平民

吉岡平助

府下東區備後町四丁目  
三十七番地

出版人

大阪府平民

前川善兵衛

府下東區南久宝寺町  
四丁目八番地



